正統ノモノナリトス。其口碑ニ曰ク、天地ノ未ダ剖判セザルニ當リ巖石ナル一男神アリ、沙石ナル女神ト伉儷トナリ地ナル男神ヲ生ム。地長ジテ風ヲ娶リ濃雲ヲ生ム、濃雲飛雲ト相婚シテ露ヲ生ム。既ニシテ初代ノ兩神即チ巖石、沙石ヨリ二十二代ノ遠裔ニ當リ「アチチンジニー」ナルモノアリ、「タウ、ヴアイ、ウボル」ナルモノヲ娶リ、一男「サヴ井ー」ヲ生ム。サヴ井ー」全島ヲ征服シ初メテ「サモア」國王ハ位ニ即キ、其姓氏ヲ「マリエトア」ト稱ス。今王ハ即チ此ノ「サヴ井ー」王ノ第二十三代ノ裔孫ナリト云フ。故ニ土人ノ口碑ニ據レバ、正統ノ國王ナリトス。又今王ノ其位ニ即キタルハ明治十一年(西暦千八百七十八年)ノ事ナリ。當時此島ニ駐紮シタル北米合衆國、英吉利、獨逸三國ノ領事ハ各其本國政府ノ名義ヲ以テ、コレガ獨立「サモア」全島ノ王タル可キヲ認可シタリ。故ニ國際法ヨリ論ズルモ亦正統ノ國王ナリトス。國王ハ世々「ウボル」嶋ノ「アピヤ」ニ居住ス。王ノ部

下ニ數十ノ首長アリ、各地方ヲ分轄ス。「ウボル」嶋ノ西南「アナ」部ヲ所轄スルモノヲ「タマセセ」(Tamasese.)ト云フ。其ノ管スル處地廣ク土肥ヘ固ヨリ強大ヲ以テ聞ユ。「タマセセ」夙ニ異志ヲ抱キ常ニ「マリエトア」ハ王家ヲ覆ヘシ以テ其位ヲ簒奪セントヲ圖ル。今ヲ去ル凡ソ三十五年前、先王ノ世ニ當リ初テ兵ヲ擧ゲ王家ニ抗ス。爾來兵亂結ビテ解ケズ、戰鬪數十回迭ニ勝敗アリ。然レドモ王軍漸ク振ハズ。部下酋長ハ欵ヲ「タマセセ」ニ送ルモノ比々相踵グ。是ニ於テカ「サヴアイ」嶋南部ノ强半、「ウボル」嶋ノ南部、「チユチユイラ」島ノ大半ハ悉ク「タマセセ」ノ有トナル。

是レヨリ先キ獨逸國「ハムブルヒ」府ニ「ヴエーベル」(Weber.)ナルモノナリ。狀貌魁偉、性膽畧ニ富ミ兼テ遇往ノ氣アリ。年少フシテ「サモア」ニ航シ王都「アピヤ」ニ住スル凡ソ二十年。其間險ヲ冒シ難ヲ蹈ミタルコト前後幾回ナルヲ知ラズ。竟ニ「南洋諸島ニ於ケル獨逸通商殖產會社」(Der deutschen

Handels und Plantagen Gesselschaft der Süd See Ingeln.)ナルモノヲ設立シ、サモア」物産貿易ノ買權ヲ壟斷シタリ、「ヴェーベル」氏又巨萬ノ土地ヲ國王ヨリ請求シ、「ニユー、ヘブリズ」「ソロモン」島ノ土人ヲ雇フテコレガ開墾ニ從事シタリ。是ニ於テカ年々收納スル處ノ金額幾萬ナルヲ知ラズ。本國獨逸ノ人モ亦是ヲ聞キ「サモア」ニ移住シ生業ヲ營ムモノ多シ。獨逸人勤勉ニシテ能ク業ヲ勵ミ、其贏儲潤利ヲ以テ土地ヲ購求ス。既ニシテ其所有スル處數十方里ニ到リ、漸ク跋扈シテ王命ヲ奉セズ。王稍ニ之レヲ患フ。既ニ「ヴェーベル」氏「サモア」駐紮ノ獨逸領事ニ任ズ。是ニ於テカ其威力强大ニシテ動モスレバ國王ヲ輕侮ス。王心私ニ平カナル能ハズ。既ニシテ「ヴェーベル」氏其職ヲ辭シ、「スチユーベル」ナルモノ此レニ代ル。然レドモ「ヴェーベル」氏ノ威權遠ク新任領事ノ上ニ出デ、王ノ權ヲ侵スヿ多シ。王愈コレヲ慊ス。曾マ悟ル處アリ、「フ井ドリヤ」嶋王「ザカムボウ」ハ其主權ヲ英國

女皇「ヴ井クトリヤ」陛下ニ納レタル故例ニ倣ヒ、己レモ亦「サモア」ノ主權ヲ英國ニ讓與セントスルノ意アリ。乃チ書ヲ作リテ英政府ニ送リ事ヲ申ス。時ニ獨逸政府太ダ殖民拓地政策ニ急ナリ。「サモア」全嶋ヲ擧ゲテコレヲ兼併セントス。「ヴェーベル」氏間ニ居リ周旋力ヲ殫クス處多シ。是ニ於テカ氏ハ王ノ其主權ヲ英國ニ讓與セントスルノ事アルヲ諜知シ、心大ニコレヲ患フ。時ニ獨國軍艦「アルバトロス」號「アピヤ」灣ニ錨泊ス。一夜「ヴェーベル」氏書ヲ王ニ寄セ其家ニ到ラシム。王到ル、「ヴェーベル」氏乃チ自カラ一文案ヲ編ミ、王ヲシテ此レニ署名セシム。文案ハ即チ先キニ王ガ其主權ヲ英國ニ讓與セントシ、書ヲ裁シテ其政府ニ寄セタルハ本心ヨリ出デタルモノニ非ラズ云々ト記シタルモノナリ。王轍チ決セズシテ去ル。次日「ヴェーベル」氏「アルバトロス」號艦長ヲ訪フ。午前十時「アルバトロス」號ハ士官數名一隊ハ海兵水手ヲ率ヒテ上陸シ、王ニ謁リテ其

宮殿ヲ去ラシムヴニーベル」氏傍ニ在リ、王ニ謂テ曰ク、此土地ハ予ガ管理スル獨逸通商殖産會社ノ所有タリ、殿下請フ速カニ去レト。王曰ク、此地ハ朕ガ曩キニ米人「コー」氏ニ賣與シタルモノナリ、然レドモ「コー」氏ハ此地ヲ利用セザルヲ以テ、朕ヲシテ永ク此レニ居ルヿヲ認許シタリ、子果シテ何物ヲ、敢テ此ノ不當ノ言ヲナスヤト。ヴエーベル」氏曰ク、予ハ先キニ此地ヲ「コー」氏ヨリ購求シタリ、此地ハ業既ニ予ガ所有タリ、殿下請フ速ニ去レト。或人曰ク、「ヴエーベル」氏ノ三千弗ヲ以テ此地ヲ「コー」氏ヨリ購求シタルハ、心私ニ後圖スル處アルヲ以テナリト。ヴエーベル」氏又曰ク、殿下果シテ此地ニ永住セントスルニ、將タ又コレヲ購ハントスルニ、即時三萬弗ヲ拂フ可シト。往復辨論竟ニ決セズ。是ニ於テ「アルバトロス」號ノ士官水兵ハ相率ヒテ王ヲ脅迫シ遂ニコレヲ放逐シタリ。海兵等又所在ノ土人ヲ逐フ。土人乃チ悉ク其家

ヲ棄テ去ル。獨人乃チ其雙鷲ノ國旗ヲ此地ニ植ツ。既ニシテ王「サモア」ノ國旗ヲ携ヘ近臣ヲ率ヒテ「アピア」市街ノ東端ニ奔ル。曾マ米國領事「グリーンバウム」英國領事「パウエル」氏來リ曾シ、王ヲシテ「サモア」ノ國旗ヲ一大椰樹ノ枝上ニ揚ゲシム。コレヲ明治十八年十二月三十一日午後四時ノ事ナリトス。「サモア」國旗ノ椰樹枝上ニ飄ガヘルヤ、「ヴエーベル」氏又「アルバトロス」ノ士官海兵ト共ニ此處ニ到リ、王ヲシテ「サモア」國旗ヲ撤去セシム。王唯々トシテ決セズ。時ニ英米ノ領事間ニ居リテ周旋シ、交モ「ヴエーベル」氏トコレヲ爭フ。「ヴエーベル」氏聽カズ、傲慢無禮ノ言語ヲ放チ、竟ニ王ヲシテ「サモア」國旗ヲ撤去セシメタリ。コレヲ同日午後第五時トナス。

歳既ニ開ク矣。然レドモ「サモア」紛糾ノ事ハ未ダ其局ヲ結バズ。人々皆「ヴエーベル」氏ノ行爲ヲ窺フ。既ニシテ「サモア」駐紮英國前領事「チヤーチワア

ード」氏ハ事ノ顚末ヲ本國政府ニ上申セント欲シ「サモア」ヲ發シテ途次米國桑港ニ到ル。乃チ事ノ大畧ヲ同地ノ一新聞記者ニ語リ以テ世ニ公ニセシム。歐米各國是ニ於テカ初メテ此事アルヲ識ル。時ニ「サモア」ノ土人兩名新西蘭ニ到リ事ノ始終ヲ殖民政府ニ告グ。事又傳ヘテ新聞紙上ニ登ル。是ニ於テカ英國政府ハ書ヲ裁シテ日耳曼政府ニ諮問スルニ「サモア」ノ事ヲ以テス。米國政府モ亦大ニ獨人ノ行爲ニ抗議スル處アリ。往復辨論輙チ決セズ。既ニシテ英國駐紮獨逸全權公使「フチン、ハッフエルド」伯ハ首相「ソールスベリー」侯ニ會シ「ビスマルク」公ノ訓令ヲ述ベ、獨逸政府ハ一切「サモア」ノ事ニ間渉セズ、且コレヲ占領スマジキヲ辨論シタリ。是ニ於テカ「サモア」紛糾ノ事件モ一時平穩ニ歸シタルモノヽ如クナリキ。

明治十九年五月一日、獨逸艦隊司令官海軍少將「クノール」氏「ビスマルク」、

「ナルガ」「クナイゼノー」ノ三艦ヲ率ヒ「サモア」ノ國都「アピヤ」ノ港嶼ニ到ル。人々皆少將ノ行爲ヲ窺フ。或ハ云フ少將ノ此行アル、實ニ獨逸國旗ノ「アピヤ」ノ南端「ムリヌー」岬嘴ニ植ツモノヲ撤去スルノ訓令ヲ受ケ、以テ來到シタルモノナリト。居ル七日、少將國王ヲ訪ハズ。會マ王悟ル處アリ、乃チ書ヲ作リテ少將ニ送ル。蓋シ書ノ意タル、獨人ガ「サモア」ニ到リ王命ニ從ハズ王命ヲ奉ゼズ、王法ヲ輕ンジ王威ヲ蔑ニシ、其行爲不敬無禮ナルヲ擧ゲタルモノナリ。少將書ヲ得テコレニ對ヘズ。次日少將、獨國領事「ズチユーベル」氏、全副領事某ヲ携ヘ小蒸氣艇ニ搭ジテ「レヽモエガ」ニ到リ、叛人「タマセセ」ハ本營ニ會シ酒ヲ置キ杯ヲ擧ゲ以テ叛將ノ健康ヲ祝賀シタリ。或人云フ、此時ニ當リ領事ハ叛將ヲ目シ演說シテ曰ク、我獨逸政府ハ公ヲ以テ「サモア」全島ノ王タル可キヲ認可セントスルハ計畫アレバ、公能ク此意ヲ體シ我ガ獨逸ノ爲メニ周旋セヨト。宴終リテ少將「アピ

ア」ニ還ル。是ニ於テカ國王ハ「タマセ」ガ獨人ハ教唆ニ依リテ氣焰ヲ煽揚シ復タ兵亂ヲ釀サンコトヲ恐レ五月九日ノ夜ヲ以テ英米兩國ノ領事ヲ政府ニ會シ時事ヲ商議セシム。時ニ新西蘭人「リーズ」ナルモノハ「サモア」政府ノ顧問官タリ。兩領事乃チコレト協議シ、曩キニ北米合衆國政府ト「サモア」政府トノ間ニ調訂シタル條約書第五條ニ據リ「サモア」ヲ以テ合衆國ノ保護國トナスヿヲ決定シタリ。因テ即日「サモア」ノ國旗ヲ米國旗ノ下ニ揚ゲタリ。今此處ニ當時國王ノ米國領事ニ寄セタル書翰並ニ米國領事ガ「サモア」國ヲ米合衆國ノ保護國トナスノ時ニ際シ發布シタル公文ヲ重譯ス。

國王ノ書翰ハ左ノ如シ。

曩キニ撒毛亞王國ハ、其庇輔保護ヲ亞米利加合衆國ニ依賴シタリ。而シテ今ヤ不幸ニモ撒毛亞民人ノ間ニ、朕カ制勅ニ背戻シ朕ガ號令ニ違反スルモノアルヲ聞ク。是ニ於テカ這儕ハ合衆國若クハ英國軍艦ノ相來リテ以テ己レヲ伐タンヿヲ怖ルヽモノヽ如シ。

朕故ニ這儕ノ斯クノ如キ蜚説ニ惑ハズ、且「サモア」國内ノ衆庶ヲシテ能ク其堵ニ安ンジ其家ヲ守リ、秩然トシテ業務ヲ力メ泰平ヲ樂マシメントス。朕一ニ卿ニ煩ハスニ此事ヲ以テセントス。卿、克ク朕ガ意ヲ躰シテ斯民ヲ安ンゼヨ。

一千八百八十六年五月十三日亞比亞ノ政廳ニ於テ。

撒毛亞國王馬理埃托亞　璽。

參政書記官塞兒　印。

合衆國領事波蘇爾德、克林波模閣下。

米國領事ノ布告ハ左ノ如シ。

撒毛亞王國駐紮合衆國領事波蘇爾德、克林波模ハ、一ニハ撒毛亞國王

馬理埃托亞殿下ノ勅ニ從ヒ制ニ應シ、一ニハ亞米利加合衆國ノ名ヲ取リ義ヲ以テ、左ノ公告ヲ發布スルモノナリ。

撒毛亞王國中ニ在ル民人ハ克ク其業務ヲ力メ泰平ヲ樂ム可シ。國王馬理埃托亞殿下ノ號令ニ反セントシ糾合シタル民人モ、亦各其堵ニ安ンジ其家ヲ守ル可シ。且今ヨリ以後萬々一、米國若クハ英國ノ軍艦ニシテ撒毛亞民人ノ、安寧ヲ累ハサントシ、予ヲシテ其謀ニ與ミシコレニ力ヲ彈サンコトヲ需ムルコトアルモ、予ハ民人ノ生命財產ヲ保護セン爲メカ、若クハ問罪ノ擧ニ非ラザルヨリハ、其需メニ應セザル可シ。

亞米利加合衆國ハ撒毛亞ノ幸福、平和、繁榮ヲ切望スルモノナリ。且今ヨリ以後撒毛亞ノ進暢ヲ傷害スルモノヲ卻ケ、一ハ貿易ヲ舊ニ復シ、以テ撒毛亞王國ノ貨殖ノ路ヲ通シ、一ハ國是ヲ確定シ、以テ人々箇々

若クハ社會ノ福利安寧ヲ保維セン事ヲ希望ス。

千八百八十六年五月十四日。

合衆國領事、
波蘇爾德、克林波摸。

又以テ當時ノ狀況ヲ想像ス可キナリ。人或ハ米國領事ノ本國ノ訓令ヲモ待タズ、直チニ此專斷ヲ下シタルヲ咎ムルモノアリト雖モ、機ニ臨ミ變ニ應シテ處置シタルモノニシテ、此レガ爲メニ內顧外患モ憂モ絕チタレバ、時ニ取リテハ妙策感ズルニ餘リアリ。

是時ニ當リテ獨逸ノ國旗ハ依然トシテ「ムリヌー」岬嘴ニ飄ヘリ、獨逸海軍少將「クノール」氏ノ率ヰ處ハ艦隊モ亦「アピヤ」灣ニ錨泊シ、人心恟々トシテ穩カナラザルノ形狀アリ。是ニ於テカ英國政府ハ濠洲艦隊ハ一軍艦「ダイヤモンド」號ヲ「サモア」ニ派遣シ、五月十四日ヲ以テ「アピヤ」ニ着ス。

「ダイヤモンド」號ハ乃チ獨逸少將ニ對シ、將官祝砲ヲ發シ、尋デ錨ヲ獨逸艦隊ノ傍ニ投ズ。居ル霎時、獨ハ艦隊相尋デ錨ヲ拔キ去ル、「ダイヤモンド」號艦長「クレートン」氏ハ即日國王ニ謁シタリ。王乃チ其艦ヲ訪問ス、盡シ禮ニ答フルナリ。王ハ艦ヲ去ルニ臨ミ二十一發ノ祝砲ヲ放ツ。二十一發ノ祝砲ハ獨立國ノ主權ヲ所有スルモノニ對シテ發スルモノトス。後二日米國軍艦「モヒカン」號「アピヤ」ニ到ル。

「サモア」駐紮米國領事「グリーンバウム」氏ハ米國桑港ノ人ナリ。深ク心ヲ「サモア」善後ノ策ニ用ヒ、竟ニ五月廿七日ヲ以テ獨逸英國ハ兩領事ト協議シ、左ノ布告ヲ發布シタリ。

布告。

日耳曼、大貌利頻、亞墨利加合衆國領事ハ爰處ニ左ノ公告ヲ發布ス。

三領事並ニ各自ノ政府ハ如何ナル形勢ニ是レ望ムト雖モ、多摩塞ヤ

ヲ以テ撒毛亞國王ト爲サズ、且コレヲ認可セザル可シ。故ニ撒毛亞ノ民人ハ克ク此意ヲ躰シ其堵ニ安ンジ其業ヲ守レヨ。

三領事ハ又特ニ中立亞比亞領ノ事務ニ關シテハ、集議院ノ威力ノ始終保維センコトヲ希望スルモノナリ。

千八百八十六年五月二十七日。

亞比亞ニ於テ。

日耳曼帝國總領事、
獨德爾、斯玄伯爾。

大貌利頻國領事、
維爾弗列德、波埃爾。

合衆國領事、
比克林波摸。

著者云フ、此布告文中ニ中立「アピヤ」領云々ト記スル者ハ、蓋シ國際法ニ所謂「コーデルラッスング」ナル者ニメ、移住地成立ノ原因如何ニ拘ハラズ、凡ソ移住者ガ協同ノ政治ヲ組織シ、且一人ノ首長ヲ撰ビ以テ結合住居スル者ヲ云フ。所謂英語ノ「セットルメント」是ナリ。博士「スタイン」氏曰ク、移住地ニ於テ人民相依リテ結合スルノ政治組織ハ吾人是ヲ共同政即チ自治政ト名ク。而シテ此自治政ハ數種ノ國民ヨリ成立スル所ノ移住地ニ於テ實際ハ必要ニ應ジテ創起スルモノナリ。其移住人民ガ各々本國ヲ異ニスルガ故ニ決シテ殖民地即チ一國政府ノ所轄地ト爲ル能ハザルガ爲メナリト。蓋シ中立「アピヤ」領ニ集議院ノ設ケアルハ、「スタイン」氏ノ說ク所ノ如ク、其移住人民ガ各々本國ヲ異ニスルガ故ニ、決シテ植民地即チ一國政府ノ所轄地ト爲ル能ハザルガ爲ナリ。

右布告ノ原文ハ左ノ如シ。

IA SILAFIA
E TAGATA UMA.

O i matou nei, o Konesula Siamani ma Peritani Tele ma le Unaite Setete o Amerika, matou te faasilasila atu ia te outou o i matou atoa foi ma o matou malo, matou te le mafaia lava i lesa le mafaia foi i aso ua mavne ona talia o Tamasese ina ia fai ma Tupu o Samoa. Matou te fai atu nei foi i tagata uma o Samoa talou te toe foi atu i o latou nuu moui ma mouofo lelei ai ma le filemu.

Matou te matua fai atu nei foi o loo tumau pea lava le faamama lui na o le feagaiga na faia e le mafai ona solia le mataupu i le.

Dr. Stuebel,
Konesula sili, Siamani.
Wilfred Powell,
Konesula Peritania.
B. Greenebaum,
Konesula o le
Unaite Setete.

Eleele sa o Apia,
Me 27, 1886.

尋デ「モヒカン」艦長ト相謀リ全島ノ諸酋長ヲ其艦ニ招集シ、左ノ盟約書ヲ調訂セリ。

吾輩馬利埃托亞幷ニ其政府ノ代議士多摩塞々幷ニ其黨ノ代議士ハ爰ニ誓戒シテ左ノ盟約書ニ

調訂署名スルモノナリ。

第一款。今ヨリ以后撒毛亞國中ニハ始終平和ヲ保維スベシ。

第二款。馬利埃托亞、多摩塞々兩黨ノ人々ハ克ク善隣ノ義ヲ守リ、善友ノ信ヲ盡スベキヿ。

第三款。今ヨリ以后全國ノ堡壁ハ毀壞ス可シ、且撒毛亞ノ民人ハ復タ戰用ノ火器ヲ須フ可カラザルモノトス。

千八百八十六年六月八日、亞比亞港錨泊米國軍艦摸比翰號ニ於テ。

多摩塞々黨ノ酋長。

吳阿。

列亞瓦以。

漆亞利々、寫。

以利。

埃爾亞彌丟亞。

斯亞。

馬伊亞瓦。

馬利埃托亞黨ノ酋長。

愛阿諾。

都馬多。

列丟亞拉。

模利吳。

吳丟馬布。

拿埃亞。

巴吳。

塞兒。

吾輩三大邦ノ代議士ハ右ニ調訂署名セル媾和條約書ノ保證人タル可シ。

日耳曼帝國總領事、
獨德爾、斯丟伯爾。

大貌利頗國領事、
維爾弗列德、波埃爾。

合衆國領事、
比克村波摸。

盟成ル。即チコレヲ全島ニ布告ス時ニ英米ハ兩軍艦共ニ二十一發ノ祝砲ヲ放ツ。實ニ明治十九年六月八日ナリ。後幾何モ無ク獨人本國ハ訓令ヲ以テ其國旗ヲ撤去セリ。

然レドモ「ヴェーベル」氏ノ志ハ尚未ダ衰ヘズ、且「タマセ」モ亦禍心ヲ包藏

シ私ニ米國保護權撤去ノ日ヲ待ツモノヽ如シ。然レバ「サモア」國ハ內憂外患交モ相薄リテ其獨立ハ到底保維ス可カラザルモノナラン。然レバ汝若シ恙無クシテ日本ニ歸ルハ日アレバ、汝ガ國民ニ知告スルニ我ガ「サモア」國ノ近事ヲ以テシ、宜シク其後來ヲ警戒シ、徒ニ鬧爭ニ浸漸シテ只管ニ「ビスマルク」翁ヲ拜崇シ、以テ十九世紀ノ大勢ニ逆ヒ、且日本ノ前途ヲ誤ラザランヿヲ是レ勗ム可シト。曾マ熱帶的ノ瘴氣漸ク肌ニ撤シ懊惱復タ支フ可カラズ。乃チ身ヲ起シ頭ヲ擡グレバ、是レ一場ノ夢ナル耶、眞耶、僞耶、睡眠朦朧トシテ辨スル處ヲ知ラズ。

著者云フ「サモア」國ニ元文字無シ。故ニ本章中ノ布告盟約書等ハ悉ク羅馬字ヲ以テ土語ヲ直寫シタルモノナリ。「サモア」國ニ到ルヤ、土人ニ教授スルニ羅馬字ノ讀法施用等ヲ以テス。故ニ今日ニテハ土人皆コレニ通曉セザルモノ無ク、竟ニ羅馬文

字ヲ以テ國文トナシタルヿ、猶布哇土人ニ於ケルガ如シト云フ。

又云フ、明治二十年九月三日、桑港發ノ報ニ據レバ、獨逸艦隊ハ「サモア」群嶋ヲ占領スルノ目的ニテ目下「シドニー」府ヨリ該嶋ニ向ケ進航ノ途中ニアリトノ事ナルガ、此報知ニシテ果シテ誤謬ナキ者トセバ、英佛米等ノ諸國ハ之レヲ默々ニ看過セザルベシ。然レバ早晩大葛藤ノ生ズベキハ太ダ必然ナラン。

○第拾六章。撒毛亞國王ニ謁スルノ記。

宮室壯ニ臺池美ニ、殿舍宏大ニシテ廊廡脩直ナリ、風ハ萬年ノ枝ヲ動カシ、日ハ承露ノ掌ヲ華ラス、コレ亞細亞的宮殿ノ形容ナリ。然レドモ門ニ衛兵ノ雖何スルモノ無ク、忽然入リテ直チニ國王ニ謁シ、左右モ亦コレヲ咎メズ恬トシテ顧ミザルモノハ、獨リ「サモア」ノ王宮ノミナラン。明治十九年七月三日午後、予「サモア」國王ノ新殿ニ入リコレニ謁ス。殿內方凡ソ

二拾疊數許リ、床ヲ設ケズ臺ヲ置カズ、地上ニ木柱ヲ立テ覆フニ椰樹ノ葉ヲ以テセリ。四面洞開シテ大氣ノ流通甚ダ拘束セズト雖モ、若シ夫レ雨來ルノ日、露降ルノ夜或ハコレガ凌ギ難キニ困ム事アランカ。地上ニ珊瑚ノ碎殼ヲ藉キ席ヲ設ケ、大王裸脚ニシテ襦袢ノミヲ穿チコハ上ニ偃臥セリ。予ノ到ルヲ看テ輙チ身ヲ起シ何ニガナ解セズヿヲ語リタリキ。會マ近侍ニ「セル」ナルモノアリ、善ク英語ヲ談ズ。乃チコレニ賴リテ自他ノ謂フ處ヲ晤了スルヿヲ得タリ。顧フニ獨逸人ハ「サモア」ノ四境ヲ占領シ、全國ハ擧ゲテ北米合衆國ノ保護ノ下ニ屬シ、且王ノ部下「タマセ」ナルモノ叛ヲ謀リテコレガ敎令ニ從ハズ、內憂外患交モ王ノ一身ニ鍾ルモノト云フ可シ。時ニ或ハ人ヲシテ轉タ後醍醐帝ガ蒙塵シテ海島ニ在マスノ現況ヲ目擊スルノ感アラシム。然レバ太平記ノ著者小島法師其人ヲシテ此際ニ到ラシメバ、輙チ筆ヲ援リテ「憂キ節茂キ竹樣、涙ひま

無き椰子の搖柴葺庵のあやしきに軒漏る雨を禦ぎかね、苦の筵を片敷て、暫し身を措く宿とおし、高峰の嵐吹落て、岸打つ波の凄く、夜の衣を返へせども、露の手枕寒ければ、昔を見あん夢もなし」ト記スルヿナランカ。

正ニ是レ

'Tis better to be lowly born,
And range with humble livers in content,
Than to be perk'd up in a glistering grief,
And wear a golden sorrow.

Henry VIII. Act II. Scene. 8.

然レモ、内憂外患交モ其身ニ薄リ「サヴ井ー」氏(「サモア」王家ノ祖先)ノ宗社將ニ覆ラントヤ、而シテ猶且恬トシテコレヲ顧ミズ、白日「カヴ」ノ酒(土人ノ釀酒)ニ爛醉シテ國事ヲ度外視シ、席上ニ偃臥シテ漸ク睡魔ノ界ニ墮ントス。王モ亦想ハザルノ甚シキモノト云フ可シ。借問ス、其午睡中夢魂

ハ知ラズ那處ニカ繞ルモノナラン。果シテ周公ヲ夢ミルヤ否、果シテ南洋諸島ノ存亡ヲ慮リ布哇ト連盟共同シテ諸島合從ハ計ヲ畫シ、以テ間接ニ自國ハ獨立ヲ保維スルノ策アリヤ否ヤ。(著者云フ、本書初版公梓後未タ幾何モ無ク「サモア」、布哇兩國ノ連盟ハ諸大國ノ批准ヲ經テコレヲ擧行シタリトノ報告ニ接シタリ。然レモ機ヲ後矣ト云フ可キ哉。)果シテ新西蘭植民政府ニ紹介シテ其國庫事務長「ジュリヤス、ヴォーゲル」氏ガ南洋島策(Julius Vogel's South Sea Islands Scheme.)ニ加盟シ、自國ハ獨立ヲ永遠ニ保維スルノ策アリヤ否ヤ。果シテ英領「フ井ジイ」植民政府ニ紹介シテ、南洋事件調訂會議ニ加賛シ委員長「サーエストン」氏(「フ井ジイ」植民政府ノ代理太守ナリ。)ニ商議シテ、自國ノ獨立ヲ保維スルノ策アリヤ否。果シテ米國太平洋漕船會社ニ紹介シ、其航線ヲ「パンゴパンゴ」港ヨリ「アピヤ」港マテ延長シ、以テ内外ノ往來ヲ迅速ナラシメ、進退活潑絶ヘザル阻隔

ハ憂ナク、緩急忽チ警ヲ世界ニ告知スルハ策アリヤ否。

「パゴパゴ」港ハ「サモア」群島中ノ「チユチユイラ」島ニ在リ。該港ハ米國平太洋滊船會社ノ所有ニ屬シ、毎ニ桑港濠洲間ノ郵便滊船ノ寄港スル處ナリ。筑波艦モ亦五日間此港ニ投錨セシガ、産物モ無ク添備品モ無キ僻地ナリ。此港ヨリ「サモア」ノ首都「アピヤ」マデ海上凡ソ七十英里アリ。「アピヤ」ハ國王ノ居住スル處ニシテ、且獨國南洋會社所在ハ地ナレバ、米國滊船ハ毎ニコレニ寄港スル、ト無シ。故ニ「パゴパゴ」港ヨリ「アピヤ」港マデ航線ヲ延長セバ、緩急事アル毎ニ直チニ警ヲ米國、新西蘭若クハ濠洲ニ報、道シ、忽チニシテコレヲ世界ニ知告スルヿヲ得可シ。

恐ラクハ其膽驚タル夢魂ニハ悟ル可ラザルモノナランカ。昔者宋徽宗ノ虜ハレテ邊城ニ在ルヤ、日ニ鷹ヲ奇キテ悶ヲ遣リ蓐ヲ排ス。人或ハ其

渭城ヲ守ルニ當リ、奮ヒテ一搏ヲ試ミ、決然飛揚シテ圍ヲ衝カザルヲ嘲ルモノアリト雖モ、其壽極メテ活潑壯快皆生氣ヲ帯ビ將ニ躍ラントスルカ如キモノアリ。徽宗ノ徽旨是ニ到リテ明カナリ。以テ亞細亞的帝王ノ本色ニ耻ヂズトナス。「サモア」王ノ如キハ然ラズ、國亡ビントスレドモ之ヲ憂フルヿ無ク、城破レントスレドモ之ヲ修ル無ク、優游閑適以テ一生ヲ送了セントス。宜ベナリ矣、民風ノ柔且弱ナルヲ。予一絶アリ、君王所願在優游、不怪民風弱且柔、城破國亡甘屈辱、高宗今日獲良儔ト。拙ト雖モ「サモア」ノ近事ヲ徴ス可シ。噫。

著者云フ、明治二十年九月十一日、仝十四日、龍動發ノ電報ニ曰ク、獨逸人ハ五百人ヲ率ヒテ「サモア」ニ上陸シ、國王ヲ廢シタリト。

○第拾六章。布哇國ト日本。

布哇ハ我ガ東鄰ノ獨立國ナリ。是レ亦將來我國ト絶大ノ關係ヲ有スル

モノナリ。近時我同胞二千餘人ハ這般諸島ニ散在移住シテ各其業務ニ服セリ。然レバ此國ノ治亂安危ハ直接ニ我同胞ニ關繫スルモノナリ。且本年ヨリ我國ト布哇トノ間ニ直接ノ滊船航路ヲ敷クノ計畫アリ。コレ亦我國ノ貿易家ガ注意ヲ忽カセニスベカラザルモノナリ。然レバ予輩先ヅコレト日本トノ關繫ヲ說カン。

布哇ハ製糖ノ國ナリ。其國ノ盛衰ハ甘蔗ノ豐歉ニアリ、砂糖需用ハ多寡ニアリ。而シテ近時其事業ノ益隆盛ナルハ、蓋シ米國ト交互貿易條約ヲ調訂シタルニアリ。此條約書ニ據レバ米國ノ貨物雜品ハ無稅ニテ布哇ニ輸入ス可ク、且布哇ノ砂糖モ亦無稅ニテ米國ニ輸入スルヲ得ベシ。

米國ノ輸入品ハ大概無稅ナリト雖モ、亦有稅ノ物アリ。即チ農產物、醬產、魚產、建築用ノ材木、土石、日用器具、玻璃、氷、鉄、繪畫、墨、生蠟、油類等ハ悉ク無稅ナリト雖モ、酒精類、咖啡、茶、烟草、藥品、蠟燭、銃器、寶石類、石鹼、帽子

等ハ有稅品ナリ。

然レバ此ノ條約ノ調訂以後、布哇ノ砂糖ハ其價ノ廉少ナルヨリ米國ニテソノ需用特ニ增殖シ、布哇國內ノ製糖事業ハ是ニ於テカ愈其隆盛ヲ極メタリ。然ルニ「キユーバ」「ヘイチー」等西印度諸島、并ニ「メキシコ」、中央亞米利加、南米諸邦ノ砂糖、糖蜜ハ在來米合衆國ノ需用ヲ供給シタルニ、近年ニ到リ皆布哇ノ砂糖、糖蜜ノ壓倒スル處トナリ、竟ニ其事業ヲ放棄シタルモノアリト。然レバ這般各國政府ハ交モ米國政府ニ紹介スルニ、布哇ノ故例ニ倣ヒ交互條約ヲ調訂センヿヲ以テシ、米國政府ガ布哇政府ト訂約シタル等一ノ權利ヲ得ンヿヲ以テセリ。然レバ近時米國々會ニテハ布哇トノ交互條約ヲ廢止シ布哇ノ砂糖ヲ有稅品トナスノ議論アリト。且布哇國糖類ノ米國ニ輸入スルニ當リ免稅金百万弗ヲ超ユト雖モ、米國貨物ノ布哇ニテ免稅ズル金額ハ僅カニ三拾三、四万弗ニ過ギズ。故

ニ其間甚シキ不權衡ヲ生シ爲メニ米國々會議員中ハ保護貿易家ヲハ此條約ハ不利ナルヲ感ゼシメタリ。且米國政府ハ初メ此條約ヲ調訂スルニ當リ各自共ニ其利益スル處等一ナルベキヲ豫想シタルニ何ゾ圖ラン米國ヨリ布哇ニ輸送スルモノハ甚ダ增殖セズシテ獨リ布哇ハ糖類ノミ其輸入ヲ增加シ竟ニ此ノ意表外ノ結果ヲ誘致シタリ。然ルニ此條約ニシテ果シテ廢止スル者トセバ唯ニ布哇國內ノ製糖事業者ニ不利益ノミニ非ズ布哇國ノ存亡興敗モ恐クハ是ヲ以テ一段落トナラン。

蓋シ交互條約調訂以後布哇國中到ル處ニ製糖事業興起シ米國獨逸ハ有財家相競ヒテ資本ヲ投シ土地ヲ購ヒ製造場ヲ建テ役夫ヲ獨逸葡萄牙支那日本等ヨリ誘引シ竟ニ今日ノ旺盛ヲ致セリ。然ルニ布哇政府ハ過般役夫ニ各分頭稅ヲ課シ僑主ヨリコレヲ徵收スルヲ以テ國庫ノ歲入ニコレガ爲メニ愈增殖スト云ヘリ。然ルニ此條約ニシテ廢止シ布哇

ハ糖類ハ米國ニテ有稅品トナリ、西印度、メキシコ、中央亞米利加、南米諸邦ノ糖類ト相競爭スルニ到レバ、其利潤モ亦隨テ減少シ、且需用モ漸ク減却スルヲナラン。然レバ布哇國內ハ製糖事業ハ是レガ爲メニ一時ニ衰微シテ資力ノ豐カナラザルモノハ或ハ其事業ヲ中絕スルモノアラン。是ニ於テカ國內ノ金融ハ一時ニ壅塞シテ役夫ハ四方ニ離散シ資本家ハ本國ニ去リテ復タ還ラズ爲メニ布哇政府ノ歲入ト布哇國民ハ生計上ニ絕大ノ變動ヲ附與スルヲナラン。而メコレガ直接ノ關繫ヲ被フムルモノハ我同胞二千餘ノ役夫ナリ。予輩豈ニ布哇ハ近事ニ注目セズシテ可ナランヤ。

頃日若衢ノ間ニ怪說ヲ傳フモノアリ。布哇政府ハ其邦土ヲ永遠ニ維持スルノ目途ナキヲ以テ擧ゲテコレヲ獨逸ニ賣與スルノ意アリト。又曰ク布哇政府ハ其邦土ヲ米國ニ讓與シテ北米聯邦ノ一トシ、國王ハ米國

「カリフオルニヤ」州ニ移住シテ米國政府ヨリ相當ノ不動産ヲ受クルヤノ内約ヲ調訂シタリト以上固ヨリ巷説ニシテ信ヲ措クニ足ラズト雖モ布哇賣國ノ事譚ハ予輩ガ數バ耳ニスル處ナリ聞クガ如ンバ昨年(明治十九年)ノ國會ニテハ二百万弗ノ公債ヲ募集スルノ議案ヲ可決シタリト然レドモ其辨償ノ方法ハ實ニ雲ヲ攫ムガ如キモノニシテ時ニ或ハ人ナシテ其方法ヲ解得スルニ困マシムト云ヘリ予嘗テ布哇國會ノ議事ヲ傍聽シテ句アリ曰ク緩頰漫論公債策諸公他日奈蒼生ト之ヲ要ズルニ布哇國ノ内情ヲ緻カニ檢驗スレバ時ニ或ハ人ヲシテ自失セシムルモノアリ其裁判所内ノ狀況國會議員投票ノ狀況○○ノ内情ハ如キハ實ニ一驚ヲ喫スルニ勝ヘタルモノアリト云ヘリ加之布哇政府ハ内閣ハ總理大臣「ギブソン」氏(米國人)ヲ始メトシ悉ク白哲人種ヲ以テ組織シ(大藏尚書「カペナ」氏ハ獨リ土人ナレドモ洋語ニ通曉セザルヲ以テ内閣

會議ニ干ハ毫モ權力アルヿ無シ)且國會議員モ亦大半ハ白人ナリ(議長「ウヲーカー」氏ハ蘇格蘭ノ人)高等裁判所長モ白人ナリ國内砂糖製造所ノ持主モ亦悉ク白人ナリ國内土地ハ強半ハ業既ニ白人ノ占有ニ歸シ國内ノ雜商業雜農業ハ悉ク支那人ノ手ニ屬シ布哇土人ハ唯其間ニ生息シテ朝三暮四僅カニ糊口生計ヲ經營スルノミ之ヲ要スルニ布哇ノ政治財本ハ悉ク白人支那人ノ手ニ屬シ獨立ノ名アレドモ實無キガ如ク眞箇ニ蟬ノ脫殼ニ似タル者ト云フ可シ嗚呼前車ノ覆後車ノ轍豈ニ猛省スル處無カル可ケンヤ豈ニ猛省スル處無カル可ケンヤ哉

"Tis Greece, but living Greece no more"

明治十三年ヨリ仝十九年ニ到ル布哇政府ハ歳出入金額ハ左ノ如シ。

年度(二ケ年間ヲ以テ一期ト定ム)歳入。歳出。歳出超過。

從明治十三年(西暦千八百八十年) 弗仙 二〇七〇二五六九四 弗仙 二二八二五九九〇〇 弗仙 二二三九〇〇

到仝 十五年(仝上千八百八十二年)

從明治十五年(西暦千八百八十二年)到仝十七年(仝上千八百八十四年)　三、〇九二、〇八五、四二　三、二一六、四〇六、〇五　一二四、三二〇、六三

從明治十七年(西暦千八百八十四年)到仝十九年(仝上千八百八十六年)　二、三三六、八七〇、四二　三、八五六、七五五、〇〇　一、五一九、八八四、五八

又以テ布哇政府財制ハ如何ヲ想像ス可キナリ。

西暦千八百二十三年ヨリ仝千八百八十四年(明治十七年)ニ到ル布哇土人ノ減少ト外國移住人ノ增殖トノ統計ハ左ノ如シ。

人口總計。外國人(支那人ヲ除ク)。支那人。諸外國人ノ增加。雜種。布哇土人。布哇土人ノ減少。

千八百二十三年	一四二、〇〇〇	……	……	……	……	……	……	……	……	一四二、〇〇〇	……
千八百三十一年	一三〇、一三三	……	……	……	……	……	……	……	……	一三〇、三一三	一一、六八七
千八百三十六年	一〇八、五七九	……	……	……	……	……	……	……	……	一〇八、五七九	二七、八三四
千八百五十三年	七三、二三八	二、一一九	……	……	……	……	九八二	……	……	七一、〇一九	三七、五六〇
千八百六十年	六九、八〇〇	二、七一六	……	……	……	五九七	……	……	……	六六、九八四	四、〇三五
千八百六十六年	六二、〇五九	二、九六八	一、二〇六	一、四五八	一、六四〇	五七、一二五	九、八五九				
千八百七十二年	五六、八九七	四、二四七	一、九三八	二、〇一一	二、四八七	四九、〇四四	八、〇八一				
千八百七十八年	五七、九八五	五、五六一	五、九一六	五、二九二	三、四二〇	四四、〇八八	四、九五六				
千八百八十四年	八〇、五七八	一八、四〇七	一七、九三九	二四、八六九	四、二一八	四〇、〇一四	四、九七四				

以上ノ統計表ニ據レバ、布哇土人ハ一ケ年ニ少クモ八百宛ヲ減少シ、外國人ハ少クモ一千宛ヲ增殖スルモノト知ル可シ。即チ今日ヨリ五十年ノ後ニ到レバ、布哇土人ハ悉皆剿滅シテ其遺子ヲ絶チ、外國人ハ漸ク增殖シテ七八万乃至十万餘ニ上リ、竟ニ「カメハメハ」王(布哇八島ヲ征服シ始メテ仝島獨裁ノ君主トナリシ人。)ノ古邦土ハ擧ゲテ異境異種ノ民人ガ專有ニ歸セン。「パリ」ノ月「ワイキキ」ノ花、千歳其光ヲ改メズ其香ヲ易ヘザルモ、故主既ニ去リテ新人コレニ代リ、若シ夫レ安息日ノ夕、天主降誕

節ハ曉車ヲ驅リテコレガ光ヲ賞シ馬ニ跨リテコレガ香ヲ訪フモハハ、「カすカ」種ハ故主人ニアラズシテ、獨リ印度歐羅巴種ハ財主ハミナラン。布哇國ハ前途モ亦悲ムベキ哉。然レ𪜈其悲ムベキモノ獨リ布哇國ノミナランヤ。獨リ布哇國ノミナランヤ。噫。

"Yet come it will, the day decreed by fates;
(How my heart trembles, while my tongue relates)
The day when thou, imperial Troy, must bend,
And see thy warriors fall, thy glories end,"

著者云フ、近來布哇國ニテハ國王及ビ內閣ニ失措太ダ少ナカラズ、民間物議喧々タリシガ、明治二十年六月卅日ニハ人民ホバルル府ニ大集會ヲ催ホセシカバ、商人職工ヨリ傭夫ニ至ルマデ內外國人無慮二千五百餘名ニ上リ、同府開闢以降ハ大集會ナリケルガ、皆一齊ニ現政府ノ非ヲ鳴ラシ、現政府ノ不完全ナルト破廉恥不道德ナルヨリ人民ノ

權利財產ヲ保護スル能ハザルヿ、及現政府ノ弊事ノ極メテ多キモノヲ矯正スル能ハズ、而シテ全躰ハ改革ヲ行フニ先タチ取敢ヘズ許多ノ弊事ヲ矯正スルヿノ二項ヲ決議シ、更ニ進ミテ其ハ所謂取敢ヘズ矯正ス可キノ弊事ヲ議決セシガ、其項目ハ王ハ直チニ現內閣ヲ退ケ、人民ガ指名スル人士中ヨリ一人ヲ撰ビテ新內閣ヲ組織セシムルヿ、現總理大臣兼外務卿「ギブソン」氏ヲ放逐シテ政府ニ任用セザルヿ、王ガ詐僞掠奪セル阿片專賣免許料七万一千弗ヲ本人ニ返附スルヿ、王ハ一切議員撰擧ニ干涉セザルヿ、王ニシテ之ヲ許諾セズンバ一層ノ大集會ヲ開キテ之ニ對スル覺悟ヲナス可シ等ナリシガ、國王ハ其勢力ノ敵シ難キニ恐レケシ前述決議ノ未ダ決了セサルニ、早クモ其內閣ヲ退ケ指名中ノ一人ヲ擧ゲテ內閣組織ノ任ヲ委ヲタリシモ、人民ハ未ダ滿足セザルヲ以テ國王ハ各國領事ヲ延キ其鎭定處分ヲ乞

ヒタリシガ、孰レモ之ヲ辭退シ、唯此機ニ乘ジ政府ヲ一洗シ、憲法ヲ改定シ、人望ニ沿フニ在リト忠告セリ。而テ此事機ノ重ナル源因ハ國王「カラカワ」陛下ヲ始メ各官衙ニ賄賂ノ醜行甚シキヨリセル者ナリト。

布哇政府ハ其新内閣員ハ左ノ如シ。

内閣總理大臣兼大藏大臣　ダブリユー、エル、グリーン。

外務大臣　ゴッドレー、ブローフ。

内務大臣　エル、エー、サーストン。

陸軍大將　シー、グブリユー、アスフオールド。

未ダ幾何モ無ク人民ノ總代人等ハ新憲法ヲ起草シ、七月五日ヲ以テ國王「カラカワ」殿下ニ提出シ、其ノ捺印ヲ促シタルニ、國王ハ憲法各條ハ是非ヲ熟考セントテ僅カニ四十八時間ノ猶豫ヲ得タルノミモ、當時極メテ混雜ノ際ニテ未ダ一讀下サヘ終ラザルニ、早クモ既ニ猶豫ノ期限過キタルヲ以テ、再ビ暫時ノ猶豫ヲ申出デタレドモ、總代人等ハ斷然拒絶シテ王ノ乞ヲ容レズ、王ハ終ニ已ムヲ得ズシテ新憲法ニ捺印シ、新内閣宰相「グリーン」氏ニ渡サレタルガ、司法大臣ハ直チニ王ヲシテ此ノ憲法ヲ遵守スベキ旨ノ宣誓ヲ爲サシメ、尋デ内閣員一同モ宣誓ヲ行ヘリト云フ。此ノ憲法ニ據レバ、立法權ハ王ト國會トニ在レドモ、王ノ否認シタルコトモ議員三分ノ二以上ノ一致ヲ得レバ直チニ行フヲ得ルモノニシテ、國王ハ實ニ一定ノ俸給ヲ受クル所ノ一貴族ニ止マリ、政務ニ參與スル特權アル位ニ過キザルガ如シ。布哇國人民ハ自由權力ハ眞ニ偉大ナリト謂フベシ。然レドモ驟擾以來人氣未ダ穩カナラズ、或ヒハ再ビ困難ニ陷ルベキヤハ恐レアリトイヘリ。何ニトナレバ目下同國ニ於テ保守主義ヲ執ル人々ハ皆ナ新内閣ヲ目シテ現政府ハ夫ノ密約ト隱謀ノ手段ヲ用ヒ、

且ツ武器ヲ以テ迫リタル改革黨ノ撰ブ處ナレバ、ソノ根據固カラズ決シテ信ヲ置クニ足ラザル者トセリ。又國民ハ甚ダ不滿足ヲ感ズルコハ他ナシ是レ國會ノ代議士ヲ撰ムニ當リ、ソノ撰擧人タリ被撰擧人タル者ノ財産ノ上ニ嚴シキ制限ヲ立テ、ソノ實際ニ就テ見レバ殆ンド禁止シタルガ如キ有樣アリ。或ヒハ在留外國人ガ未ダ布哇政府中ニモ公ケニ頒布サレザル事件ヲ探知シ、各々コレヲ本國政府ニ通報スルガ如キ不都合ノ處爲アルモ、布哇政府ハ更ニソノ擧ヲ咎メザル事等コレナリ。茲ニマタ國民ノ中ニテ國王ニ抵抗スルノ一黨アリ。毎ニ曰ク、「カラコワ」王ハ國ノ憲法ヲ廢棄スベキ權力ヲ有セザル者ナリ。何トナレバ國王ノ主權ハ憲法ニ因テ生ズル者ナレバ、其憲法ヲ廢棄シ或ハ改正スル等ノ事ハ全ク國王ガ權力ノ部内ニハ屬セザル者ナリ。然レバ國王ガ近來ノ行爲ヲ評スレバ、コレヲ限モナキ無法ノ行

爲ナリト云ハザルヲ得ズ。王ハ當時ソノ顧問ニ列リタル奸臣等ノ手ニ弑セラレン事ヲ懼レ、止ヲ得ズシテ彼輩ガ意見ニ曲從シタリト云フノ外ニハ出ザルベシト。是ニ於テカ王ノ行爲ヲ横議スル者アルニ及ベリ。加之布哇國ガ目下財政上ハ大危險ト云フハ、曾テ前首相「ギブソン」氏ガ募集シタル二百萬弗ノ公債ナルガ、今ヤ新内閣ハ右公債證書ヲ處分スベキ保證ヲ爲サヾレバ、終ニ棄絶サルベキヤノ危險ヲ生ジタリ。已ニ現首相「グリイン」氏ニハ右前政府ノ公債證書ハ今ニ於テハ早ヤ價直ナキ者ナリトノ旨ヲ確言シタリト。斯ナル時ハ右證書ノ持主ニシテ最モ莫大ノ損失ヲ被ラントスル者ハ多ク英國人ナリト云フ。呼嗟布哇國モ亦多忙ナル哉。

或人曰ク、近時布哇群島内ニ散在セル日本移住民ハ本國ヨリ味噌、醤油、織物等ヲ取リ寄スルモノアリ。獨リ是レノミナラズ、將來日本ト布哇ト

ハ間ニ貿易通商ヲ旺盛ナラシメントセバ、宜シク米國ハ故例ニ倣ヒテ交互條約ヲ調訂シ、日本ノ雜貨品ハ無税無税ニテ日本ニ入ラシムベシト。是レ實ニ某氏ノ奬説スルモノニシテ、予輩ガ現ニ布哇ニテ傳聞シタル處ナリ。偖此議論ノ是非ハ予輩ノ與リ知ラザル處ナリト雖モ、若シ夫レコレヲ實行セント欲セバ、宜シク布哇糖類ガ我國ニ到來シテ臺灣、呂宋、東印度諸嶋、香港等ノ糖類ト競爭シ得ル乎ヲ緻カニ檢覈セザル可カラズ。是レ固ヨリ尋常人士ノ熟知スル處ナリト雖モ、予輩ガ更ニ檢覈セントスルモノハ、我國大嶋、琉球地方ノ糖業トノ關繫是レナリ。

布哇糖類ガ無税ニテ我國ニ輸入シ、臺灣、呂宋、東印度諸嶋、香港等ノ糖類ト競爭シテコレヲ壓倒スルモ可也。然レ𪜈予輩ノ獨リ憂慮ニ勝ヘザル者ハ、布哇糖類ガ又我大島、琉球、薩摩、四國地方ノ糖業ヲ壓倒セン乎。是レ

ナリ。固ヨリ廉價ナル砂糖ヲ輸入シテ、我國人ガ一人モ多ク砂糖ヲ仕用スルノ便宜ト快樂トヲ得セシメンヲハ予輩ガ深ク希望スル處ナレ𪜈、是レガ爲メニ我國ニテ漸次發達進暢セントスル製糖事業ニ幾多ノ障害ヲ附與セン乎。是レ恐ルヽナリ。人或ハコレヲ聞キ輒チ謂ハントス、大島、琉球、薩摩、四國地方ノ製糖事業ハ如何ニ旺盛ナレバトテ、コレガ爲メニ衣食スル人民ハ僅ニ二三拾万ニ過ギザルベシ、此ノ二三拾万ノ人民ガ快樂ト便宜ト、是レヲ三千八百餘万人ガ廉價ナル砂糖ヲ仕用シ得ル處ノ快樂ト便宜トニ比較セバ、其輕重果シテ孰レカト。予輩固ヨリ强ヒテ保護貿易説ヲ唱道スルモノニ非ラズト雖モ、唯今日ノ狀況ニテハ我國内ニテ漸次發達進暢セントスル民間ノ事業ハ成ル可クハ保護幇助セン乎ヲ希望スルモノナリ。予輩固ヨリ布哇糖類ト日本糖類ト價格ノ比較如何ニ到リテハコレヲ精細ニ熟知セズト雖モ、一片ノ痴心コレ

ヲ默々スルニ忍ビズ、是レ斯ク曉々スル所因ナリ。今更ニ大島糖業ニ關シ左ノ諸報告ヲ拔萃シテ、世人ガ參考ニ供セントス。

鹿兒嶋縣下大嶋の糖業者は一昨十八年來の不捌にて次第に困迫に陷りたるより、昨十九年中同業の回復を圖らんとて政府へ十万圓の貸下げを願出て、既に聞届けられたるに依り、今回同地糖業者中に於て規約を設け、今後輸出する砂糖は大坂商船會社と特約を結び、專ら同會社の汽船を以て大島の名瀬港より積出すことに爲さんとて、本年(明治二十年)大坂商船會社の汽船朝日丸は去月二十一日(二十年三月)沖繩を出帆し、同所より黑砂糖四樽、鹿兒島縣下大島より同品千百樽を搭載して同二十八日夜大坂へ歸着せしが、右の内沖繩より積み來りたる分は本年の初荷にて、大島よりは二番荷なるが、例年沖繩より產出する砂糖は凡十四五萬樽に下らず、大島及び其屬島より產出

する高は七萬樽位の由なるが、昨年は夏より秋の交に掛けて雨地とも風災又は旱損の爲め大に不作を來し、殆んど半作の有樣なれば、砂糖を以て生活を立る人民は大に困難の域に陷り、就中沖繩の如きは砂糖を以て租稅を上納する處なれば第一貢糖、第二勸業糖、第三賣糖と唱へ凡十四五萬樽製糖する内、右貢糖凡二萬樽、勸業糖凡二萬樽は是非上納せざるを得ず、勸業糖なる物は勸業課より肥料其他の費用を借受けたる方へ償却の爲め上納する物にて、賣糖は農民の所得にして勝手に賣拂ふことを得るものなるが、昨年の如き不作に際しては右第一第二の砂糖を引去る時は凡十四五萬樽の内僅に三萬樽位の賣糖を餘すのみなれば、本年は二種の上納糖丈けの製造は濟みたるも賣糖は未だ初荷を積出す場合に至らずして、僅に四樽丈を見本として積來りしものなりと。又之に反して大島の納稅は總て金納なる

を以て砂糖は出來次第に積み送るの例なるが故に、此度二番荷の大坂に到着するに至れり、最も本年一月十三日同會社へ依頼したる品もあれ共、昨十九年は風害の爲め甘蔗は頗る不作にて近年にあき少額の取入れなれば、隨て本年の輸出は昨十九年に比して凡二万千八百丁餘の減少あらんとの豫定なれば、大坂地方にても輸入の減したるが爲めに價も次第に小堅き運ひに至り、目下百六十目一斤に付大島上四錢七厘、中四錢五厘、下四錢二厘位の取引直段あるが、昨十九年中産地より長崎及び大坂に積出したる總高を聞くに、德の島より二万七千丁、惠良部より三万三千丁、(此の二島は大島の屬島なり。)池利より四千丁、イコモより四千丁、赤木名より四千丁、東古見より二千七百丁、注用より三千丁にて合計六万七千五百丁なりと。又今廿年に積出べき豫算額は、德の島より一万八千丁、惠良部より一万八千丁、池利より二千丁、イコモより二千丁、赤木名より二千丁、東古見より千七百丁、注用より二千丁にして合計四万五千七百丁の豫算ありと。

大坂商船會社の朝日丸は去る十三日(二十年四月。)沖繩を出帆なし、昨夜大坂に歸港したるが、同船は沖繩産の黒砂糖五十挺、大嶋産砂糖二千挺を積み來りたり。沖繩は目下砂糖製造の最中なるが、大嶋は最早製造濟とありたる由なり。

○

草の屋の賤かたはあと巨歟の、大宮人につけまほしけれ。

○第拾八章。布哇在留日本移住民。

同窓ノ友人福島武治氏、曩キニ布哇政府ノ招聘ニ應シ日本移住人民ノ監督官ヲ以テ、布哇群島中ノ「カワイ」島「レフエ」村ニ在リ。筑波艦ノ「ホノルル」港ニ寄着スルヤ、予ニ書ヲ寄セテ久濶ノ情ヲ述ベ、且曰ク、「ホノルル」近

傍ニハ日本移住民ノ在ルモノ無シ、足下若シ這輩ガ現況ヲ視察セント欲セバ、宜シク「カワイ」島ニ來ル可シ、請フ東道ノ主人タラント。予乃ハチ十九年九月十四日午後五時ヲ以テ「カワイ」島行ノ滊船、イワラナイ」號ニ搭ズ。船客中ニ一日耳曼人アリ、「カワイ」島某製糖所ノ持主ニシテ、日本ノ移住民ヲ使傭スルモノナリト。予乃ハチコレニ日本移住民ノ批評ヲ諮問シタルニ、輙チ曰ク、日本役夫ハ或ル部分ニ酷ダ宜クシテ、或ル部分ニ酷ダ宜シカラズト。蓋シ適切ノ批評ニシテ能ク穿チタル格言ナリト云フ可シ。下等船客中ニ一日本人アリ、其郷管ヲ問フニ東京ノ產ニシテ、今春此國ニ移住シ、現職ハ料理人ナリト答ヘタリ。

「カワイ」島滞在中、山口縣ノ移住民中ニテ竊盜云々ニ關シ二人相鬪爭シ爲メニ一人ハ鐵槌ヲ以テ其額上ヲ打擊サレ、竟ニコレヲ福島氏ニ訴ヘタルノ訟ヲ聽キタルコアリ。且這般移住民ニ關シ見聞スル處甚タ尠シ

トセズト雖モ、要スルニ其完全ナルモノハ布哇總領事安藤太郎氏ガ外務大臣(當時ノ外務大臣井上伯)ニ具狀シタル報告書ニ過グルモノナシ。今其報告書中ヨリ左ノ記事ヲ拔萃ス。

○各耕地我ガ勞働者就業上ノ優劣如何。　本官ノ巡見セシ勞働者ハ山口、廣島、福岡、熊本ノ四縣民ニシテ、其ノ內職業ヲ勉勵シテ雇主ノ滿足ヲ得タル者ハ山口、廣島二縣ヲ以テ第一トス。而シテ其ノ間優劣ナキニ似タリト雖モ、潔癖アリテ節儉ナルハ山口縣民或ハ廣島縣民ニ一歩ヲ讓ルガ如シ。其所謂潔癖トハ家屋ノ灑掃、衣服ノ洗濯善ク行屆キタルヲ云フ。怠惰ノ徒ハ勞働後橫臥雜談、又ハ博奕飲酒ニ耽リテ其ノ自用ヲ辨スル能ハサル一般ノ弊風ナルガ故ニ、潔癖ハ其ノ勤勉ノ一端ヲ見ルニ足ルヘキモノトス。然レトモ博奕ハ其ノ毒一般ニ蔓延シテ各耕地之ナキハ殆ト稀ナリ。唯其ノ耽溺ノ淺深ニ由リテ妨害ノ自他

ニ及ボスト然ラサルトアルノミ。又熊本、福岡ノ者ニ至リテハ一般ノ比較上其勉强節儉固ヨリ山口、廣島二縣ノ下ニ出ヅト、雖モ、概シテ純粹ノ農夫ナルガ故ニ博奕ノ一事ヲ除ケバ、平生就業上ニ於テ雇主ヨリ苦情ヲ蒙ルヿ先ヅ稀少ナリト謂フベシ。耕地博奕ノ甚シキニ至リテハ彼等連宵不眠身體疲勞スルヲ以テ尋常ノ動作ニモ堪ユル能ハズ、遂ニ疾病ニ陷ル者往々之アリ。且此ノ輩其ノ毋友タラザル者ヲ敵視シ、害ヲ他人ニ加フル小少ナラズトス。然レドモ近來ハ其巨魁ヲ嚴罰シ或ハ歸國セシメタルヨリ、風俗多少改良ニ赴キタルヲ覺ヘタリ。偖又移住民中今日猶怠惰放縱ヲ以テ嫌惡セラルヽ者ハ、千葉、東京、神奈川ノ如キ都會ニ接近セル地方ノ縣民ナリ。(此等ハ悉ク第一回渡航人ニ屬シテ人選最モ疎漏ナル分。)此ノ間ニハ新聞記者ト自稱スルアリ、演說家アリ、劍客ノ落魄者アリ、兵士アリテ就業以來虐使ノ苦情絕期

ナク、而シテ其ノ訴狀ノ文章字體共ニ看ルニ足ルベキ者往々之アリ。此ノ輩ニシテ當耕地ノ對遇働作ヲ甘ンスベキ謂ナキニヨリ其ノ苦情決シテ無理ナラズト信ス。故ニ移住民タル者ハ僻村ノ純農ニシテ白米ハ一歲中祝日、祭時ノ外食セザル如キ輩ニ限ルヘシ。此ノ如キ農夫ナルトキハ當地ノ勞働ヲ以テ決シテ難事トハ看做サヾルナリ。本官巡回ノ際、第一回渡航ノ一農夫ニ就キ其ノ職業ノ難易ヲ質問セシニ答テ曰ク、耕地ノ働作ハ概シテ日本ヨリ容易ナリ。今其ノ一二ノ證據ヲ掲ゲンニ、第一肥料ヲ用ヰズ、(各耕地共甘蔗ノ培養ハ多ク漑水ノ一法ニ由ル。)第二肩背ヲ勞セズ、(耕地ノ運搬到處牛馬ヲ使用ス。)第三日曜日ノ休業アリ、第四夜業ナキ等是ナリ。然レドモ蔗葉ヲ剝去スルト、勞働定時間內休息スル能ハザルノ二事ハ當初不慣ノ輩ニ於テ言ベカラサルノ困難ヲ覺ユルナリ。蔗葉葦ノ如ク兩邊銳利ニシテ之ヲ剝去ス

ル時指掌ヲ刺傷スル甚シキヲ以テ、凡一月餘ハ兩手腫痛シテ用ニ堪ヘザルヲ常トス。又故鄉ニ在リテ勞働ノ定時ナク隨意ニ田間ニ息休シ、喫烟或ハ雜談セシ風習ヲ直チニ一變セラルヽハ、其苦辛又手痛ヨリモ甚シキ者アリ云々ト。蔗葉剝却ノ一事ハ暫ク置キ、我役夫ノ定時間內間斷ナク働作スルニ苦シムノ一點ハ本官其ノ語ノ至極着實ナルニ感嘆セリ。又一方ニ向ヒテ二三ノ縣民雜居スル一耕地ニ於テ其ノ狀況ヲ觀ルニ、働作上甲縣ハ乙縣ト競ヒ、二回ノ新來ハ一回ノ先進ト爭ヒ、以テ雇主ノ滿足ヲ博セントスルアリ。此等ハ決シテ他邦人ニ未曾見ノ異質ナリト、雇主等モ贊稱セリ。殊ニ彼等支那人ト一耕地ニ働作スルトキハ、翌日ノ疲勞ヲモ顧ミズ非常ノ勉力ヲ奮フニヨリ、或ル耕地ノ如キハ單ニ多數ノ支那人奬勵ノ爲ニ日本人ヲ傭使スルアルニ至レリ。布哇公使曰ク、舊進ノ異質ヲ有シ耕事ニ機敏ナル日本人ニ

シテ加フルニ連續勞働ノ習慣ヲ以テセバ、世界無比ノ農夫タルベキニ惜哉ト。此ノ語頗ル過稱ニ似タリト雖モ、又其實ナキニ非ザル可シ。布哇群島中甘蔗耕作ノ地方ハ總計八拾五ケ所、其ノ內我カ移住民ノ就業スル場所ハ四拾八箇所ニシテ、其ノ人員二千八百六拾人、即チ廣島、山口、熊本、福岡ノ四縣ヲ多數トシテ、滋賀、岡山、和歌山、東京、神奈川、千葉等ノ諸縣民ナリトス。本官赴任後各耕地移住民一般ノ狀況ヲ通察スルニ、苦情今猶存シテ雇者被雇者ノ間兎角ニ協和セザルモノアルハ第一回ノ渡航人ニシテ、即チ前條ニ記載スル如キ純農ニ非ザルノ輩ナリ。其ノ他第二回、第三回ノ渡航者ニ至リテハ、一般ニ善ク其業ニ從事シ目下先ヅ事情平穩ナリト謂フ可シ。抑モ當初勞働者ノ苦情起因スル所ヲ概言センニ、其ノ間千姿萬狀ノ情實アリト雖モ、要スルニ第一ハ我カ人民海外ノ生活ニ喑ク、次ニ風土ニ忸レズ、又事業ニ熟セ

ザル等ヨリ當初ハ事々物々艱難ナラザルハナク、殊ニ言語ニ通曉セザレハ主僕ノ間情意隨ヒテ壅塞シ、雇主ハ妄ニ不順怠惰ト唱ヘ、彼雇者ハ一概ニ殘虐無法ト訴フルニ至レリ。又各耕地ノ地主若クハ支配人ナル者ヲ見ルニ其ノ勞働者ヲ使役スルニ寛アリ、猛アリ、巧アリ、拙アリ、又其ノ地ニ氣候ノ温和ナルアリ、嚴烈ナルアリ、便ナルアリ、不便ナルアリ。而シテ第一回渡航人ノ內遊惰ニシテ虛弱ノ徒、不幸ニモ猛ニシテ拙ナル雇主ニ就キ、氣候嚴烈ニシテ不便ナル地方ニ分送セラレタルモノ少カラス。是又苦情ノ一大原因タリシト篤信セリ。耕地ノ所有主ニシテ巨大ノ金額ヲ費シ雇入タル勞働者ノ事ナレバ、其ノ辨償ニ十分ナル使役ヲ爲スハ當然ノ理ニシテ、又彼等其ノ輩ニ對シテ慈愛恭敬ノ意ヲ表ス可キ情義モナケレバ、保護法律ノ如何ニヨリテハ中間虐使苛遇ノ形迹ヲ顯ハス者アルモ決シテ、怪ムニ足ラサルヘ

シ。然ルニ今日ニ至リテハ我カ移住民漸ク風土ニ慣レ事業ニ熟シ言語モ幾許カ通曉セシヨリ隨ヒテ主僕ノ間逐次ニ調和、加フルニ新條約締結以來ハ我カ通辨、醫師ノ各地ニ分遣セラレシヲ以テ、彼等ノ便宜廣大ナル又昔日ノ比ニ非ズトス。蓋シ各耕地ニ勞働スル移住民各種ノ中今日我カ人民ノ如ク保護ノ周到ナルハ、當地ニ於テ未曾有ト云フモ敢テ過言ニハ非サル可シ。

○隨意渡航人月給ノ二割五分ノ貯金。　明治十八年四月以降、十九年三月迄貯金トシテ布哇國大藏省ヘ預入ノ總額ハ洋銀二萬五千百二十一弗六十仙ニシテ、此ノ利子四百二十九弗トス。但シ利子一箇年五分ノ割合ナリ。

著者云フ、此預金額ハ近ク布哇政府ノ國庫ヨリ拂戻ヲ請求シ、我外務官吏中ニテ之ヲ管理スルヿトナリタリト云フ。

○隨意渡航人員縣名區別ハ左ノ如シ。

一第一回渡航人。(明治十八年一月。)

總數九百四拾五人。(男女小兒共。)

內譯。

四百二十人　山口縣。　三百廿二人　廣島縣。

二百十四人　神奈川縣。　三十七人　岡山縣。

三十二人　和歌山縣。　十三人　三重縣。

十一人　靜岡縣。　五人　滋賀縣。

一人　宮城縣。

一第二回渡航人。(明治十八年六月。)

總數九百八拾九人。(男女小兒共。)

內譯。

三百九十人　廣島縣。　二百七十六人　熊本縣。

百四十九人　福岡縣。　十二人　神奈川縣。

三十七人　新潟縣。　八人　千葉縣。

七十四人　滋賀縣。　十人　群馬縣。

三十三人　和歌山縣。

一第三回渡航人。(明治十九年二月。)

總數九百二十六人。(男女小兒共。)

內譯。

四百九十人　山口縣。　三百五十人　廣島縣。

三十六人　熊本縣。　四十九人　神奈川縣。同寄留人。

著者云フ、去十八年二月以來、我政府ト布哇政府ノ保護ニ由リ、三年ノ約定ヲ以テ我邦ヨリ布哇群島ニ渡航セシモノハ、前後三回ニテ

其總人員二千八百五十九名ナリシガ、其内歸朝、解約、死亡等ニテ數百人ヲ減ジ、現今群島各耕地ニ在テ約定ニ從ヒ勞働スル者男一千八百八十九名、女三百五十三名、小兒九十六名、合計二千三百三十八名アリ。今此ノ人員ヲ諸縣下貫屬ニ由テ類別スレハ左ノ如シ。

廣島縣民八百五十二名○山口縣民八百二十五名○熊本縣民百八十七名○福岡縣民百三十名○神奈川千葉群馬諸縣民合テ百○一名○東京府民七十四名○滋賀縣民五十六名○和歌山縣民三十七名○新潟縣民三十五名○岡山縣民三十三名。

以テ日本移住民現狀ノ如何ヲ知ル可シ。然レバ今日ノ情況ニテハ雇者ト被雇者トハ漸ク相調和スルハ傾向アリテ、深ク余輩ガ思慮ヲ煩ハスニ足ラザル者ニ似タリ。予輩ハ日本ニ在ルヤ、各新聞紙ヲ閲讀シテ日本ノ移住民ガ布哇ニ在リテ虐使苛遇到ラザル無キヲ知リ、心私ニ憤悶ニ

禁ヘズ、一度布哇ニ到リテコレヲ檢覈センコヲ思意セリ。而ルニ何ソヅ圖ラン、身親シク布哇ニ至リテ各移住民地ノ現況ヲ見聞スレバ、一トナク二トナク悉ク豫想ノ外ニ出デ轉タ人ヲシテ一見百聞ニ若カズハ感アラシメタリ。蓋シ這般ノ誤聞虚報ハ移住民中ノ書生演說者等ノ手ニ出デタルモノニシテ、這輩身躰懦弱、資性懶惰、文筆口舌ニ巧ニシテ勞働使役ニ堪ヘズ、時ニ或ハ監督者ノ呵責ヲ被フリ心私カニ不平ニ禁ヘズ、竟ニ這般ノ造語ヲ以テ本邦ニ知告シタルモノナランカ。固ヨリ這般ト雖モ時ニ或ハ悉ク造語ニ非ラズシテ間々正確ノ報告アルナラント雖モ、要スルニ此輩ガ自己ノ不平ヲ訴ヘタルマデナレバ、予輩ハ敢テ之ニ信ヲ措カザルナリ。然レバ人アリ若シ布哇ニ移住民ヲ遣出スルハ利害ヲ諮フ者アレバ、予輩ハ左ノ數件ヲ以テ其利益アルヲ奬說セントス。

（第一）日本人民下等社會ガ其職業ニ就クヲ得ル事。

日本ニテハ人口多クシテ事業尠ク、隨テ下等社會ガ其職業ヲ得ルニ困ムヿアリ。然レバ這輩ガ布哇ハ如キ勞力ハ賃銀高貴ナル箇處ニ移住シテ、其ハ衣食住ノ欠乏ヲ補充シ、漸ク其得利ヲ儲蓄シテ、新事業ヲ興起スルニ到レバ、日本國ノ爲メニハ直接間接ハ利益アルモノト云フ可シ。且甲去リテ布哇ニ移住スレバ、乙日本ニ在リテコレニ代リ甲ノ職業ヲ承ケ繼グヿナラン。且甲布哇ニ到リテ高貴ナル賃錢ヲ得テ漸ク生計上ニ餘綽ヲ生ジ、爲メニ本邦ハ物產ヲ取リ寄セ盛ンニ之レヲ注文スルヿトナレバ、丙モ亦コレガ爲ニ新タニ職業ヲ得ルヿナラン。即チ一人ノ移住者ハ三人ノ利益トナル都合ナリ。是レ予輩ガ移住者ノ多カランヿヲ奬說スル所因ナリ。

因ニ云フ、日本住移民ハ周年一日各拾時間宛(午前六時ヨリ午後四時ニ到ル。)勞働ス可キモノニシテ、其給料ハ每一人一ケ月銀貨九弗、別ニ食料六弗ヲ支給ス。但シ日曜日幷ニ布哇國ノ大祭日ハ休業トス。

(第二) 日本下等社會ニ規律的ノ勞働法ヲ開導スルヿ。

勞働法ニ規律無ク時間ハ價値ヲ辨知セザルハ、日本農工商社會ノ通弊ナリ。モーニタ嘗しまつたら一服煙草をやらーずかトハ是レ日本農夫ノ套語ナリ。西洋勞働ノ法ハ然ラズ、規律ト時間トヲ確定シ肅ト順序ヲ紊サズ、烟草喫飯ハ各其刻限ヲ定メ時間外ニコレヲ爲スヲ許サズ。然レバ日本ノ移住民ハ當初コレニ忸レズコレニ習ハズ、時ニ或ハコレガ爲メニ幾多ハ苦情ヲ釀シタリ、雖モ近時ハ漸クコレニ熟シコレニ慣レ西洋勞働ノ法ニモ亦通曉スルニ到レリト云フ。語ヲ易ヘテ謂ヘバ這輩ハ海外ニ到リテ西洋勞働法ヲ實地ニ演習シタルモノナリ。然レバ這般ノ西洋勞働法ヲ演習シタル二千ノ役夫ガ三年ノ後漸ク其法ニ慣熟シテ本國ニ歸リ、日本在來ノ勞役社會ノ間ニ交

リテ其業ニ就カバ必ラスヤ這般勞役社會ニ絶大ニシテ且有益ナル變動ヲ附與スルナラン。且後日我國有爲ノ事業家ガ這輩ヲ使傭スルニ至レバ自他ノ利益蓋シ尠少ナラザル可シ。是レ予輩ガ布哇移住者ノ多カランヿヲ奬說スル所因ナリ。

(第三) 日本國ノ資本ヲ增殖スルヿ。

日本移住民ガ一昨十八年一月初メテ布哇ニ到リ各其業務ニ服セシヨリ爾來幾カニ二年ニ過キザルモ本邦ニ送附セシ金額ハ業既ニ拾万弗ニ上レリ。且這輩ガ在布哇日本總領事ノ手ヲ經テ布哇政府ニ附托シタル預入金額モ亦數万弗ニ到レリ。之ヲ要スルニ這般人民ハ日本國內ニテ衣食住ニ窮迫シ復タ止ム可カラザルヲ以テ竟ニ布哇ニ移住シタルモノナリ。而メ其利得スル處ヲ儲贏スルヿ業既ニ斯クノ如シ。語ヲ易ヘテ謂ヘバ這輩ハ日本ニテ博取ス可カラザル富貴ヲ布哇ニテ博取シタルモノニシテ即チ日本ノ資本ヲ增殖シタルモノナリ。是レ亦予輩ガ布哇移住者ノ多カランヿヲ奬說スル所因ナリ。

(第四) 日本下等人民ニ冒險進取ノ氣象ヲ涵養シ兼テ其知識ヲ增殖スルヿ。

一山一水ハ間ニ跼蹐シテ其膽略極メテ矮少ニ險ヲ冒カシ危ヲ蹈ムノ氣慨無キモノハ日本人民ノ短處ナリ。然レバ此ノ短處ヲ矯正スルハ先ヅ海外遠征ノ氣象ヲ涵養スルニアリ。是レ亦タ予輩ガ布哇ニ移住民ヲ遣出スルノ議案ニ贊成スル所因ナリ。

日本人民ハ又極メテ海外ノ事情ニ暗ク、コレヲ知悉スルモノハ特ニ尠シ。然レバ這輩ヲシテ海外ニ移住セシメ、廣ク世界ノ事物ニ通曉セシムル可キハ、コレ今日ノ急務ナリ。コレ亦予輩ガ布哇移住者ノ多カランヿヲ奬說スル所因ナリ。

以上ニ於テ予輩ハ吾國人ガ單ニ布哇ニ移住遷徙セシヿヲ奬說セシト雖モ予輩ガ常ニ鋭意熱心ニ我國人ノ海外移住ヲ奬說スルモノハ獨リ布哇ノミニ限ルモノニ非ラザルナリ我同胞ノ海外到ル處ニ移住遷徙センヿヲ切望スルモノナリ顧フニ我日本ハ人口ハ歲毎ニ四拾餘万ヲ增殖シ今ヨリ五十年ヲ經過セバ輙チ二千百餘万ノ新著生ヲ產出スルヿナラン獨リ二千百餘万ハミニ止ラズ人類ハ猶利息算術ノ重利法ハ如ク增殖スルヲ以テ或ハ二千五百万以上ノ大數ニ到ルヤモ知ル可カラズ即チコレニ今日在來ノ人口ヲ加フレバ無慮六千貳百万ナラントス是レ五拾年後ノ日本人口ナリ然ルニ日本國土ノ面積ハ僅カニ貳萬五千方里ニ過ギザルベシ此ノ最爾タル海島ヤ豈ニ克ク六千二百万ノ蒼生ヲ衣食セシムルヿヲ得ンヤ否コレヲ衣食セシムルニ足ル可シト雖モ雖勞々役々トシテ朝三暮四ノ生計ヲ是レ營ムニ過ギザルヿナ

ラン焉ンゾ最大ノ快樂ト幸福トヲ博スルヿヲ得ンヤ之ヲ要スルニ日本ノ海島ハ最大ノ民人ガ最大ノ幸福ヲ博スル能ハザルモノト斷言シテ可ナリ是レ予輩ガ鋭意熱心ニ我同胞ノ海外移住ヲ奬說スル所因ナリ加之我同胞ガ海外到ル處ニ移住散在シテ生業ヲ營ミ農事ニ服シ食足リ衣厚ク漸クニシテ贏儲ノ生ズルアレバ其日常仕用スル處ノ物品ヲ本邦ニ注文シ之レガ供給ヲ本邦ニ仰キ兼テ本邦ト脈絡ヲ通シ身外國ニ在ルモ心內國ニ在ルガ如キモノニ到レバ自他ノ利益スル處蓋シ尠少ニアラザル可シ正ニ是レ

"True patriots, we are sure,
Who left the country for country's good."

予輩毎ニ英國ノ軍艦ガ煤煙ヲ薰ラシ國旗ヲ海風ニ飜ヘシテ宇內到ル處ハ港灣ニ入リ來レバ所在ハ英國移住民ハ盛粧炫服シテ或ハ馬ニ跨リ車ヲ驅リテ誠實熱心ニコレガ好來ヲ迎フルノ狀況ヲ目擊シ心私ニ

擬痒ニ勝ヘザル處アリ然レ𪜈予輩ハ兼併主義ヲ懷抱スルモハニ非ラズ殖民政畧ヲ唱道スルモノニ非ラス唯海外到ル處ニ我同胞ノ移住散在シテ商業ヲ營ミ農事ニ服セシヲ奬説スルモノナリ海外到ル處ニ大和民族ガ莞然タル温顔ヲ見ンヲ翼望スルモノナリ海外到ル處ニ商業的ノ新日本ヲ搬造センヲ希願スルモノナリ兼併主義ヲ擴張スルト商業ヲ保護スルト孰レ殖民政畧ヲ主張スルト商業的ノ新日本ヲ搬造スルト孰レ新殖民地ニ軍團ヲ配置スルト商館ヲ建設スルト孰レ新殖民地ニ武庫ヲ建設スルト商庫ヲ建設スルト孰レ「イムペリヤリズム」ト「ゼルブス、フェルヴァーデュング」ト孰レ「ラテン」民族ノ殖民地ト孰レ「モハボリー」ト「コンモン、ツー、チール」ト孰レ「プランテーション」ト「アロッアッド、ファミング」ト孰レ南亞米利加ト濠太利ト孰レ世ノ壯士ヨ、旅館ノ二層樓ニ在リテ徒ニ空々タル妄想ヲ抱キ欲呑

喰餘子盛予

支那四百州ノ句ヲ誦ンゼズシテ、請フ徐ロニ瞰ル處アレヨ。漫ニ空中ニ城樓ヲ築クヿ莫レ。漫ニ國姓爺ヲ學ブヿ莫レ。漫ニ山田長政ヲ學ブヿ莫レ。海外到ル處ニ商業的ノ新日本ヲ搬造スルコソ、汝ガ今日ノ急務ナレ。

○明治十九年九月十五日、布哇嶋甲哇（カワイ）客舍書感。

流落天涯歲月遷、敢無一事對前賢、漫言傲骨從佗毀、自咲庸才待世憐、瘴霧癘煙窮北路、嵯風蜑雨極南船、可堪萬里檀山下、徒過人生廿四年。自註、漢人呼布哇曰檀山、又註、此日實當予第二十四回誕辰、第七、第八故及。

○

著者云フ、丹峨羅（ダンガロー）亞神靈夢物語（「サモア」事件）ハ予ガ客年八月十五日、熱帶海上筑波艦内ニ於テ屬稿シタルモノニシテ、歸朝後本年二月再ビ校正補缺セシモノニ係ル。然ルニ本年二月發兌ノ英國「ナイーンテ

敬壯香云。悲

ンス、センチュリー」雜誌第百八號ヲ閲讀シタルニ、曾マ「ジー、キンロック、クック」氏ガ「サモア」嗚論ヲ掲載セリ。予コレヲ抄譯シテ此處ニ附記セントセシガ、前後太ダ交雜シテ讀者ノ腦裡ヲ紊亂センヿヲ恐レ、竟ニコレヲ中止シタリ。讀者請フ該雜誌ヲ閲ミシテ「サモア」最近ノ出來事ト「マリエトア」王ノ「サヴァイ」島ニ出奔シタル顚末ト「ヴェーベル」氏ガ復タ獨逸國旗ヲ「サモア」政廳ノ屋上ニ植テタルノ始終ヲ詳知セヨ。

南洋時事終。

自跋。

南洋時事成ル矣。如何ナル文字ヲ以テカ卷末ニ附セン。南洋トハ何ゾヤ。未ダ世人ガ毫モ注意ヲ措カザル箇處ナリ。然レバ予輩ハ南洋ナル二字ヲ初メテ諸君ガ面前ニ拉出シ、是レガ注意ヲ惹起セントスルモノナリ。南洋ナル新物躰ト新向頭トヲ初メテ捉ヘ來リシ面目ヲ自得スルモノナリ。良シ自得シタリトテ敢テ望ム處アルモノニ非ラズ、唯自カラコレヲ喜ビ、自カラコレヲ樂ミ、其見聞スル處ヲ心ニ問ヒ心ニ對ヘ、悠々然閑々乎トシテ以テ滿足スル處アルノミ。予輩固(モト)理論家ニ非ズ、實業

家ニ非ズ、然リトテ文字ニモ嫻ハザレ共、心許リハ聊カ多情纏綿ノ小詩人ヲ以テ自カラ任ズルモノナリ。

"A Youth to Fortune and to Fame unknown:
Fair Science frowned not on his humble birth,
And Melancholy marked him for her own."

然レバ若シ夫レ小雨霏々タルノ夜、點滴瀟々トシテ芭蕉葉上ニ濺ギ、四隣人定リテ萬籟寂然タルノ際、會マ客窓ニ兀坐シテ破机ニ憑リ影燈ニ背キ恍惚トシテ自家ガ腦裡ニ在ル無何有ノ鄉ニ彷徨シ、幾般ノ新風色ヲ描畫スレバ、是レ江州司馬ナラザルモ轉タ青衫ヲ濕ホサシムルモノアラン。借問ス其描畫スル處ハ蓋シ「ラレグ

ロ」ノ賦中ノ風色カ、否「イル、パンセローソー」ノ賦中ニ在ルヲ如何セン。人或ハコレヲ見テ謂ハントス、子ガ限リアルノ學問ト些少ノ識見トヲ以テ纔カニ二三ノ地方ヲ歷覽シ、國ニ歸レバ忽チ得々然トシテ漫ニ三閭大夫ヲ學ヒ賈生ニ擬シ、何ゾ其言行ノ酷ダ「ヴ井レージ、ハムプデン」村ニ似タルヤ、何ゾ其文字ノ骯髒ニシテ且纏綿ナルヤト。嗚呼是レ何ニノ言ゾ、予輩曾テ蝦夷ノ山中ニ蟄居シ麋鹿ヲ友トシ狐兎ニ伴ヒ、時ニ或ハ蹴毬調馬以テ半生ヲ醉夢ノ裡ニ徒費シタルノ間ハ、意匠太タ太平樂ニシテ、未ダ世人ガ厭フガ如キ言語ヲ發シ、世人ガ憎ム

ガ如キ文字ヲ寫シタルヿ無カリキ。然ルニ客年南洋諸嶋ヲ巡覽シ先ツ「クサイ」嶋ニ到リテ其土人減少ノ實蹟ヲ觀察シ、濠洲、新西蘭、「フヂー」嶋ニ到リテ「アングロ、サクソン」民族ガ跋扈强梁ヲ極メ其固有ノ地主ヲ放逐シテ自家、コレガ新主人トナリタルノ實蹟ヲ目擊シ、「サモア」嶋ニ到リテ其宗社顚覆ノ活戲ヲ實視シ、北布哇ニ航シテ其國勢ノ蟬ノ脫殼ノ如キ始末ヲ見聞シ、心遽ニ賈誼ニ擬シ屈原ヲ學バザルヲ得ザルノ場合ニコソ立チ到リタレ。

"A land of slaves shall néer be mine."

人或ハ又謂ハントス、子ハ得々然トシテ自カラ詩人ナリト宣言シ、而シテ其文字ノ卑賤ナルト詩囊ノ膨滿ナラザルトヲ如何セント。誰レカ知ラン南洋時事一篇ノ組、事ハ悉ク是レ夢ノ如ク幻ノ如ク正ニ是レ一篇ノ長詩賦ナルヿヲ。然レバ若シ夫レ明治七十年ニ當リ白髮脩眉ノ矧川子ガ漸ク世事ノ悰惚ナルニ倦ミ俗羈ノ冗絆ヲ脫シテ一枝ノ鉛筆、一丁ノ行李、飄々乎トシテ再ビ南洋ノ列嶋ニ巡遊シ、歸來其得ル處ノ諸篇ヲ同人ノ間ニ似サバ、特ニ其詩囊ノ膨滿ナルヲ誇ルヿモアランカ。何ニトナレバ此時ニ當レバ南洋ノ諸嶋ハ悉ク白哲人

種ノ占有スル處トナリ「チュートニック」民族ニ「ラテン」民族ニ「スクラヴォニック」民族ニ到ル處ニ散在移住シテ生業ヲ營ミ物産ヲ興シ、却リテ矧川子ガ詩料ニ供ス可キモノ太ダ增殖ス可キヲ以テナリ。然レ𪜈獨リ畏ル矧川子ガ遊惓キテ而メ本國ニ歸來シ再ビ南洋時事ヲ著ハスニ當リ、コレヲ眞成ニ閲ミシコレヲ誠實ニ讀ムモノヽ多數ハ是レ我同胞ノ大和民族ニ非ラズシテ、却リテ日本國裡ニ散在スル「チュートニック」民族ニ「ラテン」民族ニ「スクラヴォニック」民族ナルヿヲ。吁嗟矧川子モ亦竟ニ "It was thus the Latest Minstrel sung" ナル哉。噫。

咄々書空彼一時、先生深意少人知、漫論得失非吾事、日暖南窓讀宋詩。」

貨殖論成字未安、補辭轉句苦難圓、尙畏失筆傷清雅、又剪殘燈半夜看。」

先生捆筆意欣々、誰道通篇似献芹、抗上積埃新拂拭、一杯麥酒酹吾文。」

南洋時事稿成。會得三絶句。乃取以附卷尾云爾。

著者云フ、頃日黒本植氏ナルモノ、加州金澤ヨリ遙カニ書ヲ寄セテ曰ク、南洋時事中日本ヲ以テ商業國トナスノ論説ハ、己レガ平素懷抱スル處ノモノニ酷類スト。乃ハチ氏ガ著ハス處ノ春霞日記中商業教育ヲ擴張スル論説一篇ヲ謄寫シ、コレヲ贈附サレ、併シテ予ガ詩ニ次韻シタル三絶句ヲ寄投サレタリ。予深ク知己ニ感シ、三詩ヲ左ニ掲グ。

圖南張翼正斯時、固怪今人總不知、論去論來何快事、五千里外獨題詩。」

粟散境中何可安、滿腔熱血結爲團、英雄所見本同揆、會意一章浮白看。」

自評自點豈欣々、君意不唯在献芹、何日相逢傾火酒、舊髭激昂話斯文。」

敬香云。眞個壯遊。

敬香云。宛然漁洋。

敬香云。無限情致。無限風神。

敬香云。得意之遊。得意之詩。

敬香云。眞景眞詩。可咏可歌。

敬香云。凄絶。

敬香云。好景可想。

○南洋航行中雜咏。

雙眸一碧水中央、數曲高歌意氣揚、壯志半酬人未老、舵樓睨視大南洋。

舷燈照枕滅還明、吊榻欹危夢未成、蜑雨嵯風人萬里、愁心一夜聽潮聲。」艙中用吊床(ハンモック)承句故及。

風孕三帆動晚涼、濠關北去望蒼茫、不知今夜何邊泊、月白波高赤道洋。」

目斷蒼溟萬里秋(ナツ)、天邊那處是濠洲、何來孤鶚拂雲起、皎月影高南半球。」

馬車聲歇路西東、製鐵樓頭月似弓、三月濠洲秋色冷、滿天風露聽吟蟲。」濠洲客中作。

奈是悠々行路何、由來身世太蹉跎、土酋墓畔瀟々雨、添得遊人暗淚多。」新西蘭途上。

嵯風蜑雨五千程、耳熟狂濤怒浪聲、船入海門多勝事、珊瑚礁上白鷗鳴。」到布哇。

敬香云。徑寫所見。眞景眞詩。

敬香云。感到筆隨有此傑作。哥克不朽。

咖啡花落晚風香、噴火山頭欲夕陽、莫向土人尋往事、太平洋水碧茫々。」布哇島懷古。

日落殘雲鎖海門、荒村風物易黃昏、秋深椰樹花如雪、埋却英雄未死魂。」布哇島懷甲比丹(カピテン)、哥克軼事。

閱得人情險似山、鵬途奚復唱間關、嗟吾去矣成何事、熱帶圈中三往還。」

○初版南洋時事諸新聞批評

（明治二十年五月二十四日、二十五日）

○朝野新聞社說

南洋時事ヲ讀ム　著書ノ世ニ出ズルノ多キ古來未ダ今日ノ如ク盛ンナルハアラズト雖モ概ヲ皆燕雜粗笨ニシテ大方讀者ノ一粲ヲ博スルニ足ラズ間々文章ノ遒勁奇拔ナルモノナキニ非ズト雖ドモ其着眼スル所ノ趣意ト之ヲ叙述スル所以ノ意匠トハ則チ拙劣ノ誹ヲ免カレズ時ニ或ハ着眼高クシテ意匠ニ富メル者ナキニ非ズト雖モ其文字章句ハ即小兒夜半ノ囈語ニ異ナラズ意匠文章共ニ優美ニシテ且ツ着眼ノ高尚ナル者ニ至ツテハ吾輩常ニ其少ナキヲ憾メリ頃日志賀重昂氏著ハス所ノ南洋時事ヲ讀ムニ及ンデ少シク平生ノ遺憾ヲ慰ムルヿヲ得タリ南洋時事ハ僅々二百頁ノ小冊子ニ過ギズト雖ドモ其慷慨悲歌、燕趙壯士ノ口吻ニ似タル所アリ山ヲ寫シ水ヲ畫クノ情致優美ナル古人ノ游記文ニ似タル所アリ其世態ノ變遷ヲ說ク所ハ即チ歷史家ノ筆ノ如ク其地理ノ遠近交通ノ便否ヲ說ク所ハ即チ地學者ノ筆ノ如ク其事實ヲ擧ゲテ將來ノ趨勢ヲ說ク所ハ統計家經濟家ノ筆ノ如シ一片ノ小冊子ニシテ詩歌アリ議論アリ叙事アリ小說アリ筆路縱横ニシテ意匠ノ錯綜ナル「南洋時事ノ如キハ世間多クアラザルノ新著ナルベシ若シ夫レ各科ヲ分離シテ一々其優劣ヲ觀査セバ世間慷慨ノ士ハ之レニ

超過スルノ慷慨談ヲ爲スベク詩文專門家ハ之レニ超過スルノ名詩妙文ヲ作ルベク經濟家ハ之レニ優過スルノ經濟論ヲ爲スベク其他歷史家小說家地學者ノ如キハ亦タ各々一端ノ長所ヲ以テ著者ヲ壓倒スベシト雖ドモ多端ノ筆路ヲ取捨シテ之レヲ僅々二百頁ニ過ギザル小冊子ニ包括シタルヿ南洋時事ノ如キハ吾輩ノ多ク見ザル所ナリ故ニ讀者ノ眼界常ニ變轉シテ毫モ倦ムヿヲ知ラズ唯ダ卷冊ノ終リ易キヲ憂フ是レ豈ニ近來縱々粹ニ上ボル所ノ雜書ト同ジク故紙堆裡ニ埋沒スベキ者ナランヤ然リト雖ドモ吾輩ノ此書ヲ賞スルハ唯ダ運筆自在ニシテ思想多端ナルガ爲ノミニ非ズ其價値遠ク之レニ超過スル所ノモノ在テ存スルガ爲メナリ其者果シテ如何曰ク著者ノ烱眼早クモ南洋諸島ニ及ビ其政治上經濟上及ビ貿易上ノ利害ハ大ニ我ガ日本ノ利害ニ關係アルコトヲ看破シ躬自ラ之レニ渡航シ、鑽煙蹈雨ノ間ニ諸島ノ形勢ヲ觀査考察シタルコト是レナリ

夫レ乾陸ノ南太平洋ニ在ル者極メテ多ク方サニ歐洲諸國ノ蠶食略奪スル所トナリ土人ノ運命ハ晨ニシテ夕ヲ計ルベカラズト雖ドモ歐洲諸國ノ開拓セル殖民地ハ日將月就遠カラズシテ南半球ニ富强文明ノ新世界ヲ現出セントスルノ勢ヒアリ而シテ我ガ日本ノ南洋諸島ヲ距ルヿノ遠カラザルヤ利害ノ關係ハ極メテ大ニシテ且ツ極メテ近シ然ルニ世ノ貿易策ヲ講ズル者動モスレバ此ノ好隣國ヲ度外視シテ毫モ巨大ナル利

害ノ關係アルヿヲ知ラズ適マ之ヲ知ル者アルモ尙ホ南洋諸島等ヲ閑視シテ調査報告ノ勞ヲ執レル者ナシ今著者ノ如キハ宙ニ世人ノ度外視スル所ヲ度外視セズシテ重大ナル利害ノアルヿヲ看破シタルノミナラズ亦タ幾多ノ艱難ヲ辭セズシテ奮然赤道直下ヲ横ギリ躬自ラ諸島ノ間ニ遊ンデ之レガ形勢ヲ査察シ以テ一部ノ好書ヲ著ハセリ其着眼ノ俊拔ナル設令字句文章ノ觀ルニ足ル者ナカラシムルモ尙ホ讀者ノ少ナキヿヲ憂ヘザルベシ況ンヤ筆路縱横ニシテ意匠亦タ多端優美ナルヲヤ

南洋諸島ハ我ガ日本ノ好隣國ナリ之レト通商上ノ關係ヲ厚クセバ彼我兩ツナガラ大ニ利スル所アリトハ南洋時事ノ著者ガ大聲疾呼シテ唱道スル所ナリ今著者ガ揭グル所ノ統計表ニ據レバ「ニユー、サウス、ウエールス」。新西蘭。「クヰンスランド」。南濠州。「タスマニア」。「ヴヰクトリア」。西濠州ノ七州ハ我ガ明治九年ヨリ同十九年ニ至ルノ十年間ニ於テ二百二十九万六千名ニ過ギザリシ所ノ人口ヲ增シテ三百廿三万三千有餘名ト爲セリ增加ノ割合實ニ四割ニ過グ又タ右ノ七州ハ同年間ニ於テ四百八万七千餘「エークル」ニ過キザリシ所ノ耕作地ヲ增シテ八百二万九千弱「エークルス」ト爲セリ增加ノ割合實ニ九割六分有餘ナリ又明治九年ニハ輸入四千六百廿七萬三千磅ニシテ輸出ハ即チ四千四百四十萬ト千磅强ナリシモ明治十九年ニハ增シテ輸入六千三百廿六萬九千磅弱輸出五千百五十五萬三千磅强トナレリ又同年間ニ於テ右七州

ニ於テ鐵道電信ノ延長スルヿ左ノ如シ

地名		明治十九年 哩	明治九年 哩	增加ノ割合
ニユー、サウス、ウエールス	△鐵道	一、七七七	四三七	三〇、六六
	○電線	一〇、三五一	、、、	、、、
新西蘭	△	一、六五四	四五二	二〇五一
	○	四、四六三	三、一五六	四一、四一
クヰンスランド	△	一、四三四	二六五	四四一、一三
	○	七、五三三	三、九五六	九〇、四一
南濠州	△	一、〇六三	二七四	二八五、七九
	○	五、三四六	、、、	、、、
タスマニア	△	二五七	一五〇	七、一三三
	○	一、六三五	三九六	三一、二八七
ヴイクトリア	△	一、六八〇	六一七	一、七二二
	○	三、九四九	二、六二九	五、〇二〇
西濠州	△	一八四	三八	三八、四二一
	○	二、二三四	七六六	一九、一六四

右七州ノ人口ハ三百二十三万有餘ニ過ギズト雖ドモ其輸出入ノ合計ハ我ガ金貨五億七千四十餘万圓ノ多キニ及ブ之ヲ我ガ三千八百万ノ人口ヲ以テ僅々六七千万圓ノ輸出

入ヲ有スルニ比レバ貧富ノ差モ亦タ大ナリト云フベシ我ガ日本ノ輸出入ノ總額ヲ人口ニ均分スレバ一人平均二圓ニ足ラズト雖ドモ南洋七州ノ輸出入ハ一人平均殆ンド百八十圓ニ近カシ概略我レニ九十倍ノ富資ヲ有スルニ非ラズンバ決シテ此ノ如クナル能ハザルナリ又タ我ガ日本ノ始メテ鐵道敷設ニ着手シタルハ明治五年ニシテ今日マデ築造セル里數ハ纔カニ三百英里强ニ過ギズ新西蘭國ノ鐵道工事モ亦タ明治五年ニ着手シタル者ニシテ爾後築造セル所ハ既ニ千六百五十英里强ニ及ブ其進歩ノ迅速ナル我ガ日本ニ比スレバ實ニ五倍以上ノ速力ヲ有スル者ト云ベシ而シテ鐵道事業ノ進歩ノ迅速ナルハ獨リ新西蘭ニ止マラズ「クヰンスランド」ノ如キ「ニユー、サウス、ウエールス」ノ如キハ皆遠ク之ニ超過スルヿ前表ヲ見テ之ヲ知ルベシ南洋諸州ノ進歩ノ迅速ニシテ我ガ日本ノ進歩ノ遲鈍ナル豈ニ慨嘆ニ堪ユベケンヤ世ノ南洋時事ヲ讀ム者亦タ皆吾輩ト感慨ヲ同フスベシト信ス

吾輩ハ新西蘭ノ鐵道工事ハ我ガ日本ニ比スレハ五倍以上ノ速力ヲ以テ速進シタルヿヲ說ケリ然レモ是レ唯ダ鐵道敷設ニ從事シタル歲月ト其間ニ成就シ得タル線路トヲ比較セル者ニノ土地ノ廣狹人口ノ多少ニ至テハ之ヲ度外ニ置ケリ若シ夫レ右ノ比較ニ加フルニ人口ヲ以テセン乎我ガ日本ノ人口ハ三千八百萬ニ近キモ新西蘭ノ人口ハ纔カニ五十八万强ニノ我ガ日本ノ六十五分ノ一ニ過ギズ故ニ日本若シ新西蘭ト同一

ノ速力ヲ以テ鐵道ヲ敷設セバ明治五年以來ニ成就シ得タル處ハ當サニ十万英里ニ過グベキ筈ナルニ實際ハ僅々三百英里餘ニ過ギズ是レ新西蘭ノ鐵道事業ハ無慮我日本ニ三百五六十倍スルノ速力ヲ以テ進歩セリト云フモ敢テ不可ナキナリ一人平均ノ輸出入額ヲ擧レバ新西蘭ハ我日本ニ九十倍シ鐵道事業進歩ノ速力ヲ比較スレバ新西蘭ハ我ガ日本ニ三百五六十倍ス而シテ此富資ト此速力トヲ有スルモノハ獨リ新西蘭ノミニ止マラズ其他南洋ノ諸殖民地概ネ皆然ラザルハナシ即チ著者ガ南洋七州ノ人口ハ三百有餘萬ニ過ギズト雖ドモ若シ其購買力ヲ以テ我ガ日本ノ購買力ニ比較スレバ一億五千萬ノ人口ヲ保有スト稱シテ可ナルベシト明言シタルハ敢テ浮夸ノ言説ニ非ラザルヲ知ルベシ其購買力ニ富ム丁此ノ如ク其進歩開發ノ迅速ナル丁彼レガ如キノ諸嶋群居シテ近ク我ガ南方ニ在リ苟モ之レト通交貿易セバ彼我ノ利益實ニ計ルベカラザルモノアルナリ

且ツ夫レパナマ地峽開鑿工事竣功ノ後チハ日本ハ東洋商業ノ中心トモ爲ルベク新西蘭ハ南洋商業ノ中心ト爲ルベシト云フガ如キ又日本ト南洋諸島トノ交通ニハ往來共ニ貿易風ヲ利用スルヲ得ベシト云フガ如キ我日本ノ石炭ハ安キモ一噸五六圓ヲ下ラザルニ濠洲「ニユー、カッスル」ノ石炭ハ一噸二圓三四十錢ニテ買フコトヲ得ベシト云フガ如キ又愛蘭ノ婦女ハ本國ニ於テハ炊婢ト爲ッテ五十弗ノ年給ヲ受クレド英國

ニテハ七十五弗ヲ受ケ濠洲ニ到レバ百八十弗ヲ受ケ其他ノ勞力モ亦タ之ニ準シテ高價ナルガユヘ上下貴賤ノ別ナク皆ナ購買力ニ富ンデ驕奢ナリト云フガ如キ又寒暑ノ來往全ク我ガ日本ニ異ナルガユヘ本邦ニテハ時候後レノ物品モ之ヲ濠洲ニ輸出スレバ恰モ季節流行ニ適スベシト云フガ如キハ皆ナ著者ガ實際ニ就テ調査講究セル貴重ノ意見ナリ吾輩ハ今マ著者ガ南洋諸島ト通交貿易スルノ利益ヲ列擧セル文字ヲ抄錄シテ本論ヲ終結スベシ

(第一)濠洲ハ在來未ダ我人ガ甚ダ交通往來セザリシ邦國ナルヲ以テ今日ニシテ是レヲ我ガ物産ノ新販賣市場トセバ其取引モ亦極メテ活潑ニシテ壯快ナル可ク且ツ贏利モ亦尠少ナラザル可シ

(第二)濠洲ハ我ガ南方ノ好隣國タリ且其前途ノ大勢ヲ豫想スレバ億万ノ「アングロ、サクソン」民族ヲ保有スル大國ト成ル可シ然レバ彼此ノ通商往來ハ甚ダ希望アルモノニシテ且愈進暢發達スルコトナル可シ

(第三)濠洲立國ノ大勢タルヤ元來舊開國ニテ事業ノ尠少ナルヨリ衣食住ノ欲之ヲ告ゲ糊口ノ太ダ艱難ナル社會中ニテ遙往冒險ノ氣象ニ富ム者相率ヒテ移住シ竟ニ今日ノ邦國ヲ成スモノナリ然レバ這輩ハ本國ニテ其生計甚ダ艱難ナリト雖ドモ新開國ノ事業繁多ニシテ且勞力ノ賃銀高貴ナル處ニ移住シ暴カニ富貴ヲ博取シタルモノナレ

バ自カラ其性質中ニ疎率豪放ノ分子アリ然レバ我國ノ物産ハ上中下ノ諸品共ニ夫々ノ需用アルベシ是レ舊開國トノ貿易ト甚タ差異アル處ナリ

(第四)日本ト濠洲間トノ航海ニハ往復共ニ東北東南ノ兩貿易風ヲ利用スルヲ得可シ貿易風ノ區域ニ入レハ風位大タ變更セズ毎ニ一定ノ方向一定ノ速力ヲ以テ吹キ來ルヲ以テ隨テ水手ノ勞ヲ用ヒ力ヲ要スルヿモ甚タ尠シ然レバコレヲ帆走船ニセバ危險ノ憂慮特ニ尠ク且船ノ進力甚タ迅速ナリ是レヲ補蒸濣船ニセバ其間蒸濣罐ノ運轉ヲ中止スルモ可ナリ故ニ石炭ノ使用ニ莫大ノ減少利得アリ是レヲ蒸濣船ニセバ其間蒸濣力ヲ緩メ惣帆ヲ張リ風力ヲ以テ濣力ヲ補フモ可ナリ是レ亦石炭ノ使用ニ莫大ノ減少利得アル可シ然レドモ良シ蒸濣罐ヲ緩メザレバトテ帆力ヲ以テ之ヲ補ヘバ濣風兩力ノ爲メニ船ノ進度ハ特ニ迅速ナルヿナラン然レバ航海ノ時間モ減少シ隨テ石炭ノ使用ヲ減少スルモノト知ル可シ

(第五)日本濠洲ノ季節相顚倒スルヨリ生産者需要者共ニ各自ノ利益アルハ予コレヲ詳カニ論説シタレハ今畧之

(第六)日本ハ濠洲トノ貿易ヲ大ニ啓ク可キ時機ハ業既ニ到達シタルモノナリ「メルボルン」府紳商ノ大會議云々ニ附キテハ予コレヲ前章ニ登記シタリ

(第七)日本社會ニテハ近時羅紗、毛織物ヲ着衣スルヿ太タ流行シ竟ニハ下等社會モ

亦漸クコレヲ着衣スルヿナラン然レバ今日ニシテ濠洲ノ羊毛ヲ輸入シ我國人ガ至廉ノ勞力ト餘リアル石炭ノ供給ヲ以テ盛ンニ製絨ノ事業ヲ興起スレハ其利益尠少ニ非ラザルベシ

(第八)濠洲主要ノ物産即チ編「ケット」(所謂「アウストレリヤン、ブランケット」)ハ英國産ノモノニ比スレバ其價遙カニ廉少ナルヲ以テコレヲ我國ニ輸入セバ其需要モ亦尠ナカラザルベシ

(第九)濠洲主要ノ物産タル毛絲ヲ我國ニ輸入シ一般社會ノ婦女子ガ是ヲ以テ喫煙帽子、靴足袋、下襦袢、襟卷、肩掛、手袋、腕嵌、敷物、肱衝、涎掛ケ、巾着、守札、袋等ヲ製作シテ漸次手内職トセバ其直接間接ノ利益尠カラザルベシ

(第十)彼此ノ往來船舶ノ出入甚タ頻繁トナリ自他ノ事情ヲ相通スルニ到レバ其利益關繫ノ及ボス所獨リ貿易上ノミニ非ザルナリ

○報知新聞

南洋時事　志賀重昂氏ノ著ニシテ丸善ヨリ發兌ス此書ハ著者ガ南洋ヲ巡遊シテ親シク實地ニ就キ見聞ニ觸レシ事ノ苟モ工業上殖産上ニ於テ我邦ニ關シ及ビ南洋大勢ニ關スル事柄ハ記シテ漏スナク論シテ盡サヽルナキ一部ノ南洋大勢論ト云フヲ得ベク貨殖篇トモ云フベキ書ナリ書中間々著者カ經歷ノ際ニ得シ快活ナル詩ヲモ載セタリ

○每日新聞

南洋時事　ハ志賀重昂氏ノ著ナリ之ヲ讀ムニ南洋群島ノ地理ヲ說ク所ハ明細ナル地圖ヲ見ルノ思ヒアリ其山水風物ヲ序スル所ハ畫人ノ實景ヲ摸寫シタルガ如キノ妙アリ而シテ之ヲ貫クニ慷慨悲愴ノ精神ヲ以テシタル者ナレバ讀ム者ヲシテ好風明月ノ間ニ逍遙シナガラ南洋ノ地理人情風俗ヲ知ラシムルノ良書ナリ

○國民之友

南洋時事　志賀重昂氏著(丸善書店發兌)南洋時事ハ南洋近來ノ出來事ヲ說キ併テ我ガ日本ガ南洋諸島ニ向テ將來關涉セザル可ラザルノ問題ニ論及シタルモノナリ其ノ議論ニ所謂ル保護政略ノ勸業主義ヲ含有スル、如キハ少シク我人ノ敬服スル能ハサル所ナレトモ「予輩ハ兼併主義ヲ懷抱スルモノニアラス殖民政略ヲ唱道スルモノニ非ラス唯海外到ル處ニ我同胞ノ移住散在シテ商業ヲ營ミ農事ニ服セン」ヲ奬說スルモノナリ海外到ル處ニ大和民族ガ莞然タル溫顏ヲ見ン」ヲ冀望スルモノナリ海外到ル處ニ商業的ノ新日本ヲ搬造セン」ヲ希願スルモノ也」ト云フカ如キハ恰モ我カ心ヲ得タルモノナリ」且ツ文章ハ一種ノ趣味アリテ斬新ニシテ面白シ而シテ卷中驚クニ堪ヘタルハ數多ノ詩ヲ挿ンタルヿ是レナリ此ノ一點ヨリスレハ題號ヲ改メテ南洋新詩ト云フモ蓋シ不可ナカルヘシ要スルニ此レ氏ガ詞藻ニ富タルノ故ヲ以テ即チ長袖善ク

舞ヒ多錢善ク買フノ類ナラン就中「橫槊好觀舷頭月、他年豫期照我屍、壯句吟破南極雲、蛟龍舞分鯨鯢起」ノ長篇ノ如キハ尤モ秀逸ナルヲ覺フ

○時事新報

南洋時事　時事新報ノ讀者ハ記憶スベシ昨年ノ今頃農學士志賀重昂氏ガ日本帝國軍艦筑波號ニ乘リ組ミテ南洋諸方ヲ巡遊シタル其遊紀ヲ本紙上ニ揭載シタリシヲ其文辭ノ流麗ニシテ事ヲ紀スルニ極メテ鮮活特ニ立意確當ニシテ尋常ノ紀行文トハ玉璞ノ相違アリタルヿモ當時讀ム人一般ノ汎評ナリシガ氏ハ軈テ歸朝ノ後チ其歷遊ノ地興ヲ基礎ニシ實踐ノ事實ヲ用材ニシテ新タニ經營ヲ加ヘタルモノハ南洋時事ナル一部ノ經綸策トナリテ今ヤ其建築ヲ全フシタリ堂ニ上リ室ニ入テ先ヅ仔細ニ點檢スルニ南方ノ好隣國、日本濠洲貿易ノ針路ヲ說キ夫ヨリ「パナマ」運河開鑿ノ事業ガ今後南洋ニ如何ナル關係ヲ及ボスベキヤ將タ日本國ガ之ニ對シテ其利益ヲ享受スベキノ急務ヨリ轉シテ平三角ノ漸ヲ應用メ海洋航運ノ緩急ニ說キ及ボシ或ハ日本布哇兩國ノ關係就中布哇ノ砂糖業ト日本大島沖繩諸島ノ製糖業ヲ比較メ將來ノ成行ヲ豫占シタル所ハ最モ著者ノ用意ヲ視ルニ足ルベシ篇中間々慷慨激昂ノ議論ヲ交エタルハ環ロ客氣ニシテ戒スル所快活ノ詩モ亦其餘緒ナラン之ヲ以テ全篇ヲ蔽フベキニ非ズ日本ガ南洋諸洲ニ對スル經濟策政治策ヲ論ズルノ書今ニ於テ外ニ有ル無シ故ニ南洋ノ

貿易ニ志ス人ハ勿論苟モ海外ノ形狀ヲ知ラント欲セバ一部ノ南洋時事ハ購讀ヲ吝ムベカラズ一冊ノ定價ハ五十五錢ニシテ通三丁目ノ九善ヨリ發兌ス

○函館新聞

南洋時事　札幌農學校出身ノ學士ニ一才子アリ文藝ヲ嗜ミヨク之ニ長セリトノ評ハ曾テ記者ノ耳ニシタル所ナリキ爾後子ノ所在ニ就テ傳聞セザリシガサナキニ時事新報上ニ就テ忽チ氏ノ名ヲ發見シ其濠洲ノ紀行數篇ヲ登載セルモノヲ見タリ文氣豪宕策論雄偉一讀人意ヲ快フシタリシガ頃又南洋時事一卷ヲ著シタリトテ其一冊ヲ寄贈シ批評ヲ乞ハレタリ一冊二百ページ餘ノ中冊子ニテ其一斑ハ已ニ時事新報紙上ニ於テ覩ヒタル所ナリ間々東西ノ詩句ヲ引キ自作ノ詩ヲ挿ム抔氏ノ花アル筆ハ此實用實利ノ議論ヲ一層潑剌ナラシメ睡眠ヲ拭フノ思ヒアリ殊ニ北海道開拓策ヲモ對照シタルトコロ大ニ吾人ノ參考スベキ條多シトス兎ニ角南洋ノ事情ニ就テ吾人ガ智識ヲ開キシハ此書ノ賜ト云フノ外ナシ

○北海新聞

南洋時事　歐米ノ大勢ヲ論スルノ書汗牛充棟啻ナラズ獨リ南洋諸島ノ記事形勢ヲ說クモノニ至ツテハ絶テ無クシテ稀レニ見ルノ所ナリ而シテ今ヤ南洋諸島ノ實況ト大勢トヲ詳述シテ漏フサヾルモノヲ見ルニ至レリ南洋時事是レナリ著者ハ札幌農學校

出身ノ學士志賀重昂氏ニシテ文字精確慷慨ノ氣紙面ニ淋漓タリ殊ニ北海道ヲ以テ新西國ニ比較セシ條ニ至ツテハ大ニ世人ノ注意ヲ促スモノアリ南洋ノ大勢ヲ知ラント欲スルモノハ須ク坐右ニ一本ヲ置クベキモノナリ

○金城新報

南洋時事　志賀重昂氏著南洋時事一冊ヲ寄贈サレタリ氏ハ本縣出身ノ人ニシテ當時東京ニ寄留シ客年海軍省ノ特許ヲ得テ軍艦筑波號ニ搭乘シ南洋諸島ノ間ニ往來ノ親シク諸島ノ實況ヲ目擊シ大ニ我日本前途ノ大勢ニ注目スル處アリシガ遂ニ南洋時事一篇ヲ著シテ我國人カ南洋諸島ニ注目スルノ急務ヲ喚起スルニ至レリ今其言ニ曰ク我日本太洋中ニ離群獨居シテ陽ニ南洋諸島ヲ控ヘ又近ク濠洲ニ接ス焉ヲ知ラン南洋ノ鯨鰐ハ所在ヲ震蕩シ其餘波ハ疾ク馳來リテ富士山麓ニ戛摩セントテ云々又曰ク前途ヲ豫想スレバ恂ニ將來我國ノ物產ヲ販賣スベキ一大市場ナリ云々ト亦以テ氏ガ活眼遠ク我日本前途ノ大勢ヲ看破スルヲ知ルベシ顧フニ我國人ガ眼界ノ少ナル一度ビ眼ヲ西ニ注ゲバ又タ南北アルヲ知ラズ近來少シク魯領ノ如キ北方ニ眼ヲ注ク者アレド未ダ南方諸島ニ眼ヲ放ツモノナシ獨リ志賀氏軍艦ニ搭乘シテ南洋諸島ノ政治經濟ヲ目擊シ以テ我國人ノ注意ヲ喚起セントス余輩ハ他日南洋諸島ヘ我貿舶易船ノ往來スル前ニ當リテ此書ノ出ルアルハ將ニ以テ米洲大陸ヲ發見スルノ前ニ木葉ノ漂着ス

ルヲ認メタルト同一ノ名譽ヲ以テスルモ決シテ其過評ニアラサルヲ信ズルモノナリ

○讀賣新聞

南洋時事　本書ハ志賀重昂氏ノ著ニシテ該書ハ同氏ガ嘗テ南洋ニ航海中我國ノ將來ニ關シテ實見セシコトヲ述ベラレタルモノニテ快筆蕩々覺エズ人ヲシテ南洋中此佳境アルヲ知ラシム實ニ我國ノ貿易上ニハ必用ノ書ト云フモ敢テ溢美ニアラザルベシ然レドモ之ヲ言フ難キニアラズ之レヲ行フ是難シトノ古言モアレバ唯其實地ニ行ハレシメン事コソ望マシケレ

○朝野新聞

南洋時事　將來我ガ日本商人ノ努メテ商路ヲ開クベキノ地ハ濠洲ヲ始メ南洋ノ諸島ニ在リトハ實地ニ老ケタル活眼者ノ先見ナリ然ルニ我國ト左マデ遠カラザル南洋ノ事情ニ通スル者ハ我國ノ商人否商人ノミナラズ學士ト雖ドモ之レヲ知ル者尠ナシ今此書ノ發兌アルニ逢フテ便利ヲ得ル者必ラズ尠カラザルベシ本書ハ志賀重昂氏ガ實地ヲ蹈ミテ其目擊スル所ヲ記シタルモノニシテ丸善書物店ノ發兌ナリ

○改進新聞

南洋時事　該書ハ本日ノ廣告ニモアル如ク志賀重昂氏ガ曾テ南洋ニ航海中我邦ノ將來ニ關シテ實見セシ事ヲ述ベタルモノニテ我邦貿易上ニハ必用ノ書ナリト信ズ

○めざまし新聞

南洋時事　此頃通三丁目丸善書店ヨリ發兌シタル南洋時事ハ志賀重昂氏ノ新著ニシテ其緒言ニ依ルニ我ガ學者士君子ガ南洋ノ事情ヲ度外視スルガ如キ觀アルヲ慨嘆シテ著ハサレタルモノヽ如シ而シテ其書僅カニ一綴二百ページノ小冊子ナリト雖モ近來稍我ガ通商ノ路開ケタル濠洲ノ如キ又ハ我ガ同胞二千人ガ出稼セル布哇ノ如キヲ始メトシ所謂南洋ニ於ケルノ事情ヲ詳記シ附スルニ自家ノ意見ヲ以テシタルモノニメ近來流行セル著書ト其撰ヲ殊ニス蓋シ氏ハ從來南洋貿易ノ熱心家ニシテ本書記事ノ如キモ多クハ客年海軍省ノ特許ヲ得テ我ガ軍艦ノ南洋ヲ巡航スルニ乘組ミ實際ニ討究シ得タルモノナリト云フ

○通俗學藝誌林

南洋時事　志賀重昂氏著ノ南洋時事ハ丸善ヨリ發兌シ弊社ヘモ一本ヲ寄セラレタリ世ノ學士ノ多ク洋ノ外ニ航シ政治法律理科何々等百般ノ學問技術其他ノ事ニ就テ歸國ノ後ニ世ヲ益セラルヽ出版モノモ少ナカラザレドモ此書ノ如キハ其中ニモ最タルモノヽ如ク我々ハ誠ニ其土產ノ滋養ノ功驗多キノミナラズ香味ノ佳絕ナルハ實ニ書物否食箸ヲ下ニ置クヲ忘ルヽハカリナリ洋行歸リノ諸君ニハ何卒イヅレモ此ノ如キ御土產ヲ頂戴イタシタキモノナリ指間ニ金玉ノ戒指ヲ光ラシ襟邊ニ黃金ノ時計ヲ輝

カシナガテ頭腦ハ蟬ノ脱殼ノ如キ樣ニテ御歸國アルハ我々一向感服仕ラザルナリ

○詩文詳解

大江敬香述

雨窓閑話

余去歳時事新報紙上ニ於テ志賀重昂君ノ寄送ニ係ル南洋記行ヲ讀ミ其文章ノ簡明ナル其記事ノ巧妙ナル其ノ精神ノ活潑ナルニ服シ新報ノ其ノ紀行ヲ採錄スルヲ見ル毎ニ之ヲ讀ムヲ以テ自ラ樂ミト爲セリ君ノ歸朝アルヤ未ダ日ナラズシテ南洋時事ノ著アリ乃チ購フテ之ヲ見ルニ文章暢明意見新警之ニ加フルニ詩賦ヲ以テス皆唐詩ノ遺韵アリ蓋シ多ク獲難キノ述作ナリ而シテ余ハ未タ君ヲ識ラサルナリ

去月某日偶少閑ヲ得即チ君ヲ其ノ家ニ訪フ君時ニ家ニ在リ談話數刻初君余ヲ以テ一ノ「ポーエト」ト見做セシガ余ノ南洋時事上其ノ要懸ヲ說キシヨリ余ノ「ポーエト」ニハ非ラズシテ英學社會ノ一人ナルヿヲ知リ更ニ一層ノ快ヲ添ヘタリ君ハ參河岡崎ノ人幼時父ヲ喪ヒ稍ヤ長ズルニ及ンデ京ニ來リ始メ攻玉塾ニ在リ後札幌農學校ニ入リ苦學四年竟ニ農學士ノ學位ヲ得善ク英書ヲ讀ミ巧ニ英詩ヲ草シ餘力漢籍ヲ脩メ漢詩ヲ作ル蓋シ多ク獲難キノ才俊也其ノ南洋ニ航游スル已ニ其ノ着目ノ異ナルヲ見ルト雖モ是レ別題ニ屬スレバ余ハ爰ニ詩學上君ニ服スル所以ヲ述ヘ併セテ江湖才人ニ警戒スルトコロアラント欲スルナリ

抑モ君ノ南洋ニ航スルヤ濠闌、濠洲、新西蘭（濠洲大陸ヨリ壹千貳百英里ヲ隔テ北中南ノ三島ヨリ成リ南緯三拾四度ヨリ四拾八度東經百六拾六度ヨリ百七十九度ノ間ニ位シ我ガ東京灣ヲ距ル直徑凡ソ五千五百英里ノ處ニ在リ）「フヰジー」、「サモア」、布哇（我カ東隣ノ獨立國ニシテ我人民ノ彼島ニ航行シ糖業ニ從フモノ二千人アリ）ノ間ヲ巡遊シ境ニ觸レ感ヲ生スルヤ輒チ筆ヲ把リテ詩ヲ賦ス（本集載スル所ハ其ノ一斑ナリ）其詩風調高雅敢テ雕琢ヲ其ノ間ニ用ヒズ自カラ古詩人ノ遺意ヲ得タリ蓋シ故ナクシテ詩ヲ作ルハ詩ノ本旨ニ非ラズ詩ノ本旨ニ協ハサルモノハ平仄ヲ誤ラズ古典ヲ運用スト雖モ余ハ決シテ詩ヲ以テ之ヲ目セサルナリ詩ノ本旨ハ言志ノ二字ニ止マリ他ニ及ホスモノニ非ズ君ノ詩流暢別ニ古典ヲ用ヒズ直ニ見ル所ヲ寫ス是レ眞境眞詩人ナシテ吟シテ倦マザラシムル所以ナリ愁心一夜聽潮聲ノ句ノ如キ珊瑚礁上白鷗鳴ノ句ノ如キ實ニ身其ノ境ニ在ルニ非サルヨリ決シテ得可カラズ又何來孤鶚拂雲起皎月影高南半球ノ十四字ト云ヒ秋深椰樹花如雪理却英雄未死魂ノ十四字ト云ヒ恐ラクハ前人ノ未タ道破セサル處ナル可シ何ソヤ騷人ノ未タ曾テ此境ヲ經タルモノアラサレバナリ南半球ノ月哥克ノ魂君ノ詩ノ爲ニ其ノ絶景ヲ想ハシメ其ノ幽獨ヲ慰セシメタルモノニ非ズヤ

君ノ南洋時事中ニ日本貿易家ノ參考ニ供スベキモノアリト題セル一項アリ是レ獨リ

貿易家ノ參考ニ止マルノミニ非ズ今ノ詩人ハ最モ爰ニ着眼セサル可カラサルモノナリ即チ之ヲ抄出ス

予嘗テ濠洲ノ洋上詩アリ曰ク目斷蒼溟萬里秋天邊那處是濠洲何來孤鶚掀雲起皎月影高南半球ト時ニ去歳三月中旬也又濠州ノ客中詩アリ馬車靡歇路西東製錦樓頭月似弓三月濠洲秋色冷滿天風露聽吟蟲ト蓋シ我國ニ於テハ三月中旬ハ實ニ陽春清明ノ季節ニシテ千紫萬紅ノ時氣ナリ故ニ萬里秋トカ三月秋色冷ナリトカ咏スルハ妥當ナラズトノ評モアラン然レドモ北半球ト南半球トハ四季全ク顚倒シテ日本ノ春ハ濠州ノ秋ナリ彼レガ夏ハ我ガ冬ナリ然レドモ北半球ニ生レ北半球ニ長シタルモノハ或ハコレヲ逃知セズ世界中到ル處三月ハ千紫萬紅ノ季節ニシテ九月ハ黃葉紅楓ノ時氣ナリト自得スルモノナラン然レバ若シ夫レ秋風三月濠洲路人往紅楓黃葉中ト記シコレカ斧正ヲ先生ニ乞ハヽ先生ハ緩鬚鏡ヲ把リ一見シテ忽チ咄々ト呼ヒ輙チ朱ヲ研シ筆ヲ援リ春風三月濠洲路人往萬紅千紫中ト刪正サルヽコナラン斯クノ如クナレバ北半球ノ詩人墨客ノ腦中ニハ濠州ノ詩人「ケンドール」ガ夫ノ "Now the sultry December comes" (源暑ナル十二月來レリ矣)ノ長歌ノ妙味ハ蓋シ悟了ス可カラサルモノアラン(下畧)

○東京經濟雜誌

南洋時事　南洋時事ハ農學士志賀重昂氏ノ著ナリ氏ハ昨年軍艦筑波號ニ便乘シテ南洋諸島ヲ歷遊シ其親シク見ル所ニ感ヲ聞ク所ニ激シ胸中鬱勃タルノ思想乃チ溢レテ此ノ冊子ヲ成セシ者ナリ故ニ此書ヤ之ヲ概評スレバ紀行文ニ貫クニ慷慨悲壯ノ精神ヲ以テシ感ノ極マル所即チ之ヲ詩想ニ漏ラセリ是レ此書ノ紀行文ニシテ紀行文ニ非ズ經綸論ニシテ經綸論ナルニ非ス詩集ニシテ詩集ニ非ザル所以ナリ其南洋諸島ノ形勢ヲ論シテ濠太利大陸及ヒ諸島ノ來歷現狀ヲ說キ「パナマ」地峽ノ開鑿ガ南洋貿易及東洋貿易ニ與フル影響ヲ論シ將來日本ガ東洋貿易ノ中心市場タルガ如ク新西關ハ必ラズ南洋貿易ノ中心市場タル可シトテ此二島事情ヲ同フスルノ點ヲ列擧セルガ如キ吾輩ハ其注意ノ懇到ニシテ說明ノ周密ナルヲ喜フ者也殊ニ日本立國ノ根本ハ貿易製造ニアリト爲シ濠洲ハ將來億萬ノ「アングロ、サキソン」人種ヲ載ス可キ最大市場ナルヲ說キ南北半球季候相反シ日本ノ夏ハ濠洲ノ冬ナレバ互ニ其ノ時候後レノ餘リ產物ヲ貿易スルヲ得ベシト論シ其他二地間通商ノ利益多キヲ揭ゲタルガ如キハ商人ノ一讀セサル可ラザル書ナリ其他布哇殖民ノ有樣ヲ論シ顧ミテ我北海道ノ開拓及大嶋沖繩諸嶋ノ製糖業ヲ論スルガ如キ筆鋒南東二洋ノ間ニ馳セ又讀者ヲシテ倦ム能ハザラシム唯著者ハ南洋土人ノ零落ヲ見テハ白哲人種ノ堅忍勇斷ニ切齒シ日本ノ及ハザルヲ思ヒテハ黃色人種ノ前途ニ扼腕シ不知不識保護主義ノ爲メニ襲ハル、所ナリシ

ハ最モ惜ム可シ

○日本文藝雜誌

日本文藝雜誌　ハ初版南洋時事第九拾九葉ノ後半ヨリ第百五葉ノ前半マデヲ經國ノ大文字ナリトテ出版人ノ承諾ヲ經テ其紙上ニ掲載シタリ

日本文藝雜誌　ハ又出版人ノ承諾ヲ經テ初版南洋時事自跋ノ全文ヲ其紙上ニ抄錄シタリ

日本文藝雜誌　ハ又出版人ノ承諾ヲ經テ初版南洋時事ノ卷首ニ掲載スル英詩ヲ其紙上ニ抄錄シタリ

○古今詩文詳解

古今詩文詳解　ハ出版人ノ承諾ヲ經テ南洋時事中ノ唐詩ヲ强半其紙上ニ抄錄シタリ

長頭迂夫

○出版月評

南洋時事（志賀重昂氏著丸善書店發兌）頃來世人ノ耳目ヲ動カシ殊ニ商業社會ヲ震撼スルヿ絶大ナルモノハ學士志賀重昂著南洋時事ノ右ニ出ツルハナシト云フ之ヲ繙キ閲レハ寔ニ其文ノ快暢ナル其詩ノ豪宕ナル、言文放漫ノ今世ニハ稀ニ見ル所ニシテ能ク幾多ノ睡眠者ヲ醒覺スルニ足ルモノナラン今試ミニ迂夫ヲシテ其要點ヲ評セシメヨ南洋時事全篇ハ「オーストラレーシヤ」洲ノ一ナル「クサイ」島ノ紀事ニ始メ南

方ニ及テ「オーストラリヤ」「ニュージーランド」ヲ論シ更ニ北ニ轉ノ「フヰージー」「サモア」ヲ記シ尚北上シテ「ポリニーシヤ」州ナル布哇ノ事ニ終ル蓋シ著者巡航ノ先後ニ因ルナラン其第一「クサイ」島紀事ノ如キハ尋常地誌ノ少ク精覈ナルニ過キサレヒ他日幸ニ我國ト濠洲トノ通商開クルニ至ラハ此地誌モ亦篋底ヲ出ツルノ期アルヘシ

其第二「クサイ」島土人ノ減少ト題シテ優勝劣敗ノ談ニ説キ起シ同島ノ人口急ニ減殺スルノ狀ヲ叙シ其原因ヲ窮メンカ爲ニ諸般ノ實例ヲ援キ來リ是レ其外國船ヨリ病原ヲ舶齎シテ疫疾漫延スルニ由ルカ或ハ「精神力」ノ競爭ニ職ツクナラント言ヘリ然レヒ著者ハ此二原因ヲ同島人口ノ減少ニ歸スル所以ヲ擧示セサルヲ以テ未タ遽ニ措信スヘカラサルモノアリ殊ニ精神力ノ競爭ト云フカ如キハ「此ノ「クサイ」島タル外人トノ交通モ甚タ繁カラス且外國人ノ此地ニ住居スルモノハ纔カニ一二宣教師ノ在ルニ過キス云々」ノ言アルノミニシテ却テ之ヲ反證スルモノニ似タリ余ハ未タ之ヲ以テ夭折ヲ速クヘキ的ノ心力ヲ勞セシヤ否ヲ察スルヿ能ハサルナリ

著者ハ此慘狀ヲ觀テ悚然トシテ恐ルヽモノヽ如ク黄、黑、銅色等ノ人種モ遂ニ滅亡ノ期アランヿヲ憂ヒ吾人モ亦「性命ヲ保維スルノ策ヲ講セサルヘカラサル」コトヲ陳ヘ我國ノ支那ト協同連盟シ兼テ英國ト氣脉ヲ通スル」ノ良策タルヲ論セリ嗟呼是レ何ノ言ソヤ好シ「クサイ」ノ蠻民ハ實ニ白人ノ爲ニ疫病ヲ傳ヘラレテ竟ニ剿絶スヘシト

スルモ豈此ヲ以テ直ニ我同胞ヲ戒シムルヿヲ用ヰンヤ夫レ疫疾ノ感不感ハ風土、年齢、體質、人種及其境遇ニ因ルヲ以テ甲人種ノ感染セサル病モ乙人種能ク之ヲ傳フルヿアルハ醫家ノ所謂「イデヰオシンクラシー」ニ等シク固ヨリ怪ムニ足ラサレに唯人種ヲ異ニスルノ故ヲ以テ「健全無病ノ者ヨリ病疫ノ原子ヲ受クル」ノ理ハ決シテ之アラス若シ著者カ所謂全健無病トハ既ニ疫疾ノ潜伏スルモノアルモ僅ニ二三ノ患者ニ過キサルノ意ナリトセハ亦以テ背理ノ言クルヲ免カルヘシト雖モ是レ劣者特有ノ稟性ニアラスシテ優等人種モ等シク賦クル所ノ性質ナル痘瘡、梅毒ノ白人種ニ劇キヲ察シ生物ノ變種ニ此例多キヲ觀テ炳カナラン今一歩ヲ讓リテ我儂黄人種ハ此點ニ於テ白人種ニ劣ルトスルトスルモ是レ唯交通ノ爲メニシテ殺戮ノ爲ニアラス獨立ノ爲ニアラス然ラハ之ヲ救治スルノ策ハ數量ノ論ニアラスシテ品質ノ問ニアラスヤ隣保結托ニ在ラスシテ箇々衞生ニ在ラスヤ滿柳ノ質ヲ變シテ銅身鐵骨トナスニ在ラスヤ余ハ啻ニ彼ノ肥大ナレに柔弱ナル年長ナレに硬頸ナル黄人種ノ國ト協同スルノ利ヲ發見スルニ苦ムノミナラス借如利アルヲ知ルモ其實行ヲ奬フモノナリ我同胞人種ノ保維ヲ計リテ「英國ト氣脉ヲ通スル」トイフカ如キハ又何ソ言フニ足ラン

其第三ニハ南洋諸島ノ所屬ヲ異ニスルモノヲ列擧シテ歐米諸國就中獨乙カ此地ノ拓地植民ニ汲々タルヲ說キ其利モ亦鮮カラサルヲ述ヘテ此際我國人ノ宜ク自ラ警戒ヲ

加フヘキノ旨ヲ述フ叙說整然明カニ各國ノ所屬ヲ判チ尙紛糾不解ニ屬スル地ノ如キ余輩カ始メテ耳ニスルモノモ咸ク網羅シテ洩ズ處ナキニ似タリ是レ或ハ時事論一篇ノ楔子ナラン

其第四ニハ濠太利カ「南方ノ好隣國」タルヿヲ證センカ爲メ首メ其舊時ノ形勢ヲ說キ次ニ十年以來人口ノ增殖、農業ノ繁盛、貿易輸出入ノ巨額ヲ表示シ交通往來ノ媒介タル鐵道電線ノ敷延ト之ニ伴生セル公費負擔ノ重キヿヲ證シ又其負擔此ニ止マレルハ公有土地拂下ノ多キニ由ルヿヲ揭ケテ其進歩發達ノ迅速ナルヲ稱讃シ更ニ近年「スウダン」ノ遠征ニ濠洲ヨリ「義勇兵ヲ派遣シタルハ則チ其昌盛ヲ徵スルニ足レリ」トテ壯快ナル軍歌ヲ援キ來リテ一段ヲ結ヘリ且曰ク今ヨリ十年ノ後濠洲庶富ノ狀ヲ豫想シ又彼我ノ間ニ貿易風ノ利アルヲ以テ觀レハ是レ天我ニ惠ム所ノ大市場好隣國ナルヲ知ルカ故ニ世人ハ宜ク此地ノ時事ニ注目スヘシト其五ニハ「巴拿馬運河ト南洋經濟トノ關繫」ト題シ運河開鑿ハ即チ歐洲南洋間ノ航路里程五分一許ヲ短縮スルモノナレハ今後船舶ノ兩地ノ間ニ往來スルモノ轉タ頻繁ナルヘキヲ以テ若シ濠洲、新西蘭ヲ我國ノ市場トナサハ巴拿馬ノ開通ハ便チ我ニ關繫アルヿ幷ニ歐米ト我國トノ直航ニモ捷路ナルヿヲ論セリ(余ハ此章ニ就キテ評論セス)其六ハ殖產興業ト與ニ物產販賣ノ市場ヲ求メサルヘカラサルヿヲ說キ起シテ濠洲新西蘭ノ好市場ナルヿニ及ヒ

其隆昌ノ狀ト航路ノ容易ナルヿヨリ彼我互ニ好貿易品アルヲ論シ又乃者彼洲「メルボーン」府ニハ羊毛輸出及日本地内製絨場建設ノ議アルヲ聞ケリト言ヘリ其七ニハ此等ノ國(南半球)ト我國(北半球)ト氣候ノ轉倒スルヿヲ絮說シテ貿易家ノ考査ニ供シ又之ヲ利用シテ冬季用夏季用物品製造者ノ換業ナカラシムルヿヲ得ヘシト論シ次ニ濠洲ノ人口ハ現今三百萬ニ過キサレヒ其一人ノ購買力ハ我邦人ノ五十ニ該ルヲ以テ貿易ノ上ヨリ言ヘハ一億五千萬ニ均シキノミナラス今後倍ス繁闘ヲ致スノ兆アリ云々彼我通商ノ利益ハ著者十ヲ以テ算フレヒ之ヲ總約スレハ(一)貿易風ノ利用(二)濠州ハ新開國ニシテ人心豪放ナルヿ(三)氣候ノ轉倒(四)羊毛ノ廉價(五)將來頗ル繁昌スヘキコトノ五項ヲ外ニシテハ通常貿易ノ利ト異ナル所ナシ其八ニハ濠洲移住ノ「アングローサクソン」民族早晩聯合シテ獨立スルノ日アランヿヲ夢ニ托シテ公言シ其九ニハ舊國ノ人口益滋殖シテ衣食住ノ不足ヲ來シ此カ爲ニ遂ニ過亂ヲ釀スカ故ニ勢之ヲ人烟稀疎ノ地ニ移ラシメサルヘカラサルノ理ヲ論シ濠洲四十八萬方里人口三百萬ノ土ハ能ク億萬ノ蒼生ヲ容ルヘキ空隙アルモノナレハ將來之カ熱鬧繁華ヲ極ムルニ至ルハ期シテ竢ツヘシ云々

故ニ枝葉ヲ去テ其大旨ヲ約スレハ第四ヨリ第九ニ至ルマテハ濠洲現今ノ繁昌ト將來ノ隆盛ヲ揆リ之ト交通貿易スルノ巨利アルヿヲ說クニ過ギズ蓋シ時事論ノ骨子ハ此般ノ章句ニ在テ存スルナラン余カ友某曾テ久シク濠洲ニ遊ヒ親ク其事物ヲ視察シ還リテ余ニ語ルニ彼地耕牧ノ利ヲ以テシ其商業ヲ問ヘハ則チ微々振ハス特ニ我貨物ヲ售ルノ望ナシト對ヘキ而シテ指ヲ屈ムレハ是レ實ニ今ヨリ四歲ヲ溯ルニ過キス當時其田野ノ荒漠ナル、寒暖ノ中庸ナル、土壤ノ膏腴ナル、地價ノ低廉ナルヲ聞キ心竊カニ其說ニ左袒セシカ今將タ此新研ヲ讀ムニ及ンテ農業多利ノ濠洲カ僅々四五歲ノ間舊態ヲ一變シテ俄ニ我カ好市場ヲナセルニ愕然タラスンハアラス否其果シテ然ルヤ否ヲ疑ハサルヲ得サルナリ借如箇々ノ購買方ハ彼我レニ五十倍スルモ特ニ五ツノ利益アリトスルモ我ヨリ輸出スヘキ貨物ハ彼ノ常用品少クシテ奢侈品多キニ居ルヿヲ以テ觀レハ其求ムル所ハ亦唯我產物海ノ一涓滴ニ過キサラン焉ソ此ヲ以テ直ニ我好花主ナリ大市場ナリト揚言スルヲ得ンヤ然レヒ余カ此言ヲ爲ス遠ク十年ノ後ヲ察シテ論スルニアラス只今ハ先ツ之ヲ恃マスシテ試ニ其嗜好スヘキ些少ノ貨物ヲ輸出スルヲ可トスルモノナリ若シ幸ニ著者ノ望ム如ク我彼ノ貿易此ニ端緒ヲ啓キテ益旺盛ニ至リ又其十年ノ後ノ憶想モ果シテ其實ニ中ルヿアラハ何爲レソ此快筆ヲ功ナシト言ハンヤ。

其第十、第十一、第十二ノ三章ハ濠洲ノ事ト與ニ新西蘭ノ狀勢ヲ論シ尾スルニ痛快ノ愛國論ヲ以テセリ首メ新西蘭ノ地理ヲ畧叙シテ同島ノ地形地勢我日本ニ酷肖スルヿ

ヲ說キ(一)「地質學的構成、氣候」等相同キヲ以テ「土壤ノ生產力、生物ノ發育力等大差ナカルヘシ」ト謂フト雖モ論據淺クメ遽ニ信ヲ措キ難シ蓋シ火成岩ハ其肥瘠ヲ殊ニスルモノ多ク且我國ノ土ハ滿面火成岩ヨリ由來セシニアラスシテ啻ニ其一分ニ過キス況ヤ土地ノ生產力ヲ評定スルニ岩石ノ性質ヲ根基トスルハ恰モ全豹ノ一斑ト異ナラサルヲヤ之ヲ如何ニソ大差ナシト斷スル得ン其(二)(三)地形(四)商業(日本ハ將來東洋商業ノ中心、臺島ハ南洋商業ノ中心)(五)水產(日本ハ將來北洋水產漁獲ノ中心、臺島ハ南洋鯨漁ノ中心)ノ對比ハ明確斬新ナルヲ覺ユレトモ憾ムラクハ少ク紀事ノ詳密ヲ缺クモノヽ如シ其(六)人民現時ノ職業ハ農ナレトモ將來ハ二國共ニ貿易製造ノ國ナルヘシトイフハ余其何ノ意タルヲ解セサルナリ夫レ一國ノ生業ハ其風土、人民ノ多寡、稟賦、文野、隣國ノ形勢等諸般ノ事情ニ由テ同シカラサルハ勿論ナレトモ何レノ洲ニカ純一ノ業ヲ以テ國ヲ立ツルモノアランヤ所謂農國ト雖其餘地ノ拓クヘキヲ拓キテ犂鋤ヲ弄スヘキ荒蕪ヲ見サルニ至ラハ勢他ノ業ヲ求メテ生活ヲ計ラサルヘカラス又商工ノ國ト雖己カ土ヲ荒蕪ニ附シテ他人ノ手ニ委シ恬トシテ漁機ヲ轉ハシ帳簿ニ對スルモノアランヤ即チ世人カ農工商等ノ一二字ヲ以テ某々國ニ冠スルモノハ他ノ業ヲ缺如スルノ謂ニアラスシテ比較上某ノ業カ發達セルヲ以テ名ツクルモノニシテ其他ノ諸業モ皆其極度ニ至ルマテハ共ニ進ンテ止マサルナリ然ルニ耕牧ノ

業ハ土地ノ廣狹ニ由テ制セラルヽト雖他ノ二業ハ地積ノ栽限少キヲ以テ何レノ邦國ト雖(其疆域ノ廣狹ヲ問ハス)始メハ內ニ土壤ノ利ヲ收ムヘキモ民庶漸ク繁多ヲ加ヘ自國ノ財源ニ慊ラサルニ至ラハ其剩餘ハ外ニ他國ノ土地ヲ求メ或ハ他國ノ產物ヲ待タサルヲ得ス然ラハ今後幾星霜ヲ經ハ各國其人口ノ滋殖ト交通往來ノ便利等ヲ致スノ先後ニ隨ヒ早晚製造貿易ヲ營マサルモノナキニ至ラン嗚呼此ノ如キヲ稱シテ「將來商工ノ國」ト云フ其レ可ナランヤ若シ將タ著者ノ言ヲシテ農ヲ捨テ唯製造貿易ヲ事トスルノ意ナリトセハ是レ國情ニ反シ國勢ニ合ハサルノ論ニシテ三業爲行ノ大旨ニ悖ル余ハ愈其不可ナルヲ見ルナリ

其(七)ニハ新西蘭土人ノ狀態、都府港灣ノ我國ト對稱スルモノアル丨及地形上一二ノ差異ヲ揭ケ此等ノ符合アルヲ以テ世人ハ我ヲ東洋ノ英國ト稱シ彼ヲ南洋ノ英國ト呼フ其稱呼ハ相等シケレトモ鐵路ノ長短ハ彼迥ニ我ニ超ニ輸出入分頭額ハ彼ノ一人能ク我ノ六十七人ニ當ルヲ思ヒ又他日內地雜居行ハルレハ邦人皆外人ノ爲ニ壓倒セラレシ丨ヲ憶フテ痛哀悲憤ノ辭紙面ニ躍出セリ而シテ之ヲ防クノ策ハ我地形地勢ニ適セル職業ヲ撰ムニアリトテ日本ノ商工國タル丨ヲ論シ之ヲ勸奬スルノ方法ヲ詳述シ結局我國ノ支那ト東洋貿易ノ賈權ヲ爭ヒテ勝ヲ制スルノ最必要ナル丨ヲ主張スルモノヽ如シ其所謂「貿易製造ノ國」ニ就キテハ余之ヲ上ニ評セシユヱ今復此ニ贅スルヲ

止メ是レ其意商工ノ業ヲ盛ニスヘシトイフニ在リトセハ誠ニ時事ニ剴切ナルヲ覺ユ且其筆ヲ轉シテ外ニ馳スルノ處圓活ニシテ些ノ艱澁ナキハ讀者ノ感慨ヲシテ更ニ深カラシムルノ價アラン惟其言ヒ易クシテ甚タ成就シ難キヲ懼ルヽノミ若シ夫レ商工ノ學校ヲ新設擴張シ勸業吏員ヲシテ營業ノ心ヲ養ハシムル等ノ說ハ余カ全然襄祖スル所ニシテ輿論ノ歸向モ亦太タ之ト違フヿナカルヘキナリ

想フニ著者ハ經綸ノ才ニ加フルニ風流韻事ノ念ニ富ムモノヽ如ク全篇所々ニ詩賦ヲ散點シ余カ如キ傖夫スラ尙沙漠ノ羈旅ニ「オーシス」ニ愁ヒ渺茫ノ航路ニ港灣ニ歌ルノ思アラシム遮莫レ其作ハ概チ風月ノ吟詠ニアラスシテ慷慨ノ切情ヲ吐クニアラサルモノナク卷首ノ一篇ノ如キ人或ハ著者ヲ以テ跅弛ノ士トナスト雖余ハ之ヲ目スルニ唯滦洲ノ文華ヲ映スル菱花トナサンノミ亦以テ著者心事ノ尋常ナラサルヲ察スヘキカナ就中第十一ハ「ゴールドスミス ノ荒村感懷ヲ讀ミテ感アリト」題シ此詩家ノ履歷ヲ畧叙シ著者カ新西蘭ニ遊フノ當時刺蘰瓜ノ花亂開スルヲ視氏ノ作中「刺蘰瓜花徒ニ燦爛タリ」トテ愛蘭一村落ノ慘狀ヲ表セシ花モ今ハ樂土ノ物ニ化シタルヲ思ヒ時勢變遷ノ絕大ナルヲ嘆シ英人始メテ此ニ殖民シテ爾來僅ニ四十五年ヲ經サルニ此ノ如キ森々ノ狀ヲ致スモノ固ヨリ偶然ナラサルヲ說キ之ヲ顧ミテ我北海道ノ現狀ニ比較スレハ轉タ斷腸ニ堪エサルヿヲ痛論シ北海道ノ小志ヨリ產業不振ノ狀ニ及ヒ之

ヲ救濟スルノ策(一)農業ノ規模ヲ擴張シテ厚ク移住民ヲ保護シ、資本家ヲシテ大農業ヲ起サシメ又北海道ニ限リ速ニ外國人ノ移住ヲ容シ(二)農產物ノ販路ヲ擴張シテ內地、西比利亞東南岸ノ港市、布哇及其他ノ外國ニ新市場ヲ索メ(三)主要ノ農產物ヲ牧馬、麻、小麥ノ三ニ定メ(因ニ對州ノ生業ヲ換ユヘキヿヲ論ス)(四)勸業吏員ヲシテ營業主義ヲ懷抱セシメ(五)一手賣買ノ會社ヲ設置スル(附ケテ水產物凍氷輸送ノ利ヲ說ク)ニ在ルヿヲ縷々セリ始メハ宛モ詩仙ノ長賦ヲ讀ムカ如ク終ハ猶經濟學士ノ富國策ヲ講スルニ似タリ意匠婉曲立論正確一毫夸大ノ臭氣ナシ眞ニ全篇中ノ射鵰手トナスニ足レリ顧フニ此般ノ文法ハ著者特得ノ妙處、北海道ハ著者カ螢雪積學ノ地ニシテ殊ニ其殖產起業ノ論ハ蓋シ久シク實踐考驗スル所ナラン其文ノ絕唱ト稱スヘク其論ノ着實行ヒ易キモ亦宜ナルカナ

南洋時事論ハ愛國ノ精神ヲ以テ充塡シ溢レテ慷慨ノ海ヲナスモノ亦頗ル多シ是レ其目擊耳敲スル事物ハ一トシテ其カ憂憤ノ資料タラサルハナキニ山ルナラン余特ニ之ヲ其第十二ナル「新西蘭ノ酋長「ウ井タコ」氏トノ談話」ニ於テ見ル此章ニハ新西蘭ノ滅亡シテ今日ニ至リタルハ英國ト相戰フテ常ニ敗ヲ取リ漸ク國土ヲ蠶食セラレタルニ由ルヿヲ述ヘ日本モ亦轉覆ノ虞ニ備ヘサルヘカラスト言フモノヽ如シ嗟呼何ソ其言ノ不吉不祥ナルヤ苟モ此文意ヲシテ圖國土蹙ノ戰滅ヲ以テ直ニ我國ヲ推スモノト

セバ余ハ唯之ヲ杞人ノ憂トシテ齒牙ニ掛クルヿナカルヘシ然レ𪜈若シ之ヲシテ現時我社會ノ世態風俗ヲ變革シツヽアル彼ノ舞踏會ヤ女男交際ヤ國語ノ改革ヤ其他所謂改良ト稱スル新事物ヲ以テ深ク憂フルモノトセハ余ハ將ニ謂ハントス「殖產興業」カ此好新狂ヲ治ムルニ足ラサルハ猶葛根湯ノ瘋癲ニ於ケルト一般絕エテ寸効ナキノミナラス適以テ其症ヲ助長スルヿナシトセス宜ク其勢極リテ症候一變スルノ機ヲ覘ヒ毅然タル國手ヲ竢テ反正ノ劑ヲ投スヘシト但著者ノ憂憤ハ此ニ在ラスシテ別ニ淵源アリト言ハヽ余復何ヲカ言ハンヤ

第十三ハ「フヰージー」島ノ傳道師ト晤語スルノ條ニシテ其三十年來己ノ職ニ熱心ナリシヿ幷ニ其教化ノ功偉ナルヲ嘆稱スルノ語ニ過キス第十四、十五ハ「サモア」群島(一名「ナヴヰゲートルス」島)ノ紀事ニシテ前者ハ「サモア」國神ヲ夢ミテ其詫宣ヲ受クルノ顚末ヲ記ス其要、近年歐洲各國政府相競ヒテ南洋諸島ノ兼併呑噬ヲ力メ遂ニ獨乙ハ明治十八年十二月ニ「サモア」ヲ畧取セントセシヿヨリ同島ノ地理、王統、叛賊等ノ事ニ及ヒ又獨乙領事カ侵畧ノ企計ヲ運ラシテ國旗ヲ此地ニ植テタレ𪜈英米二國其間ニ居リテ事一タヒ靜穩ニ歸セリ然レトモ國王ハ獨人カ叛將ヲ教唆シテ再ヒ干戈ヲ動カサンコトヲ怕レ北米合衆國政府ノ保護ヲ仰クヘキニ決シ又叛賊ヲ以テ國王ト見做サヽルハ獨英米三國領事ノ均シク認諾スル所ナル旨ヲ約シ三國領事ハ王ト「サ

モア」兩黨トノ約條ニ對シテ保證人タルヿヲ公署シ遂ニ獨人ハ其國旗ヲ撤去セリト雖獨人侵畧ノ志ハ未タ衰ヘス又叛將ノ禍心ヲ包ムヿ依然タレハ其獨立ハ到底保維スヘカラサルヿヲ論セリ卷尾ニ附セル補言ハ卽チ其先見ヲ徵スルニ足ルモノナリ但神靈已レカ宗廟ノ覆滅ヲ悲ムノ餘リ我日本モ亦其轍ヲ踏ム勿レトテ最ドサヘ杞憂ニ富メル此旅客(著者)ヲ戒メタル如キハ恐嚇ノ術、揺摩ノ說ト謂ハサルヲ得ス神靈知ラスヤ我同胞ハ皆あすく立チ廻ルノ才子今將誰カ刃ニ劒ルノ愚ヲ學フモノアラン何ソ其言ノ無情無禮ナル遮莫レ彼レ若シ千里眼順風耳ヲ以テ我カ弱點ヲ識破シ浸漸ノ害ハ急忽ノ患ト相伯仲スルヲ辨知シテ此等ノ言ヲ爲スモノナラハ願クハ天機ヲ洩シテ余輩ノ意見ト違フヤ否ヲ昕カン

第十五ハ「サモア」國王ノ粗野、暗昧、遊惰ノ狀ヲ記シ民風ノ柔惰怪ムニ足ラサルヲ說ク寫シ得テ妙ナリト謂ツヘシ

第十六十七(終末)ハ遠ク南洋ヲ去リテ布哇國ノ事ヲ論ス其畧ニ曰ク布哇ハ近時我同胞二千人ノ移住スル地ニシテ且彼我ノ間ニ漁船航路ヲ開クノ計畫アルヲ以テ其動靜ハ大ニ我ニ關カル所アリ蓋シ晩近同國ノ糖業益盛ナル者ハ米國ト交互貿易條約ヲ締結シタルニ由リ布哇ノ砂糖ハ昔日ニ比シテ估價ノ低廉ヲ致セル故ニ需要頓ニ多キヲ加ヘタルニ由ルナレ𪜈頃者米國ハ此條約ノ不利ヲ曉リテ之ヲ廢止セント欲スルノ說

アリ若シ果シテ廢止セラル、ニ於テハ啻ニ糖業家ノ損失ノミナラズ同國ノ存亡興敗モ或ハ之ニ繫ルヿアラン又布哇賣國ノ風説幷ニ其政廳、國會、製糖場等ノ有力者ハ悉ク外國人ヲ以テ占メタル事等ヲ以テ觀レハ其國ハ恰モ蟬空ニ似テ獨立ノ名アレ𪜈實ナキカ如シ予輩豈猛省セサルヘケンヤ云々次ニ同國政府ノ歳出入金額ヲ表シテ歳出ノ超過甚キヿ幷ニ土人愈減少外人愈增多ノ統計ヲ掲ケ此ニ基ツキテ推算スレハ無慮五十年ノ後ハ復土人ノ子遺ナキニ至ルヘキヲ究ム次ニ彼我交互貿易條約ヲ結フヘシトノ巷説ヲ排斥シテ其餘響我大島、沖繩等ノ糖業ヲ壓倒シ目下漸ク發達セントスル事業ヲ滅却スルノ害アルヘキヲ論セリ布哇ノ慘狀ハ余カ曾テ數〻聞ク所ニシテ早晩(著者カ五十年ト謂フハ固ヨリ數理上ノ推算ニ過キス)其土人則絶ノ期アランヿハ著者ト同シク深ク憐ム所ナレ𪜈余カ見ヲ以テスレハ彼我貿易條約ヲ結フノ不可ヲ稱フルハ却テ是レ僻説タルヲ免レス嘗ニ痴情ヲ去テ考一考セヨ若シ我土ニシテ甘蔗ノ栽植ニ適スルヿ彼ト徑庭ナカラシメハ則チ可ナリ苟モ彼ノ我ニ優ルヲ知ラハ(余ハ理論上然リト信スルモノナリ)强テ其輸入ヲ禁遏スルヿヲセスシテ此ヲ彼ニ讓リ更ニ我天賦ノ土質ニ適スルモノヲ撰ンテ敘次之ニ換ユレハ此裴咸ナ遽ニ其業ヲ失フノ虞ナシ卽チ上帝化育ノ旨ニ於テ何ノ不可カアランヤ然レ𪜈糖業ハ我政府ノ夙ニ勸奬スル所ニシテ既往ノ年月ハ之カ適否ヲ經驗スルニ餘アリシナラン知ラス果シテ其産額

海外ノ適地ト匹敵スルヤ否

第十七ハ「布哇在留日本移住民」ノ現狀ニ就キテ曩者布哇總領事カ我外務大臣ニ具狀シタル報告書ヲ摘載シ此移住ノ爲ニ(一)日本人民下等社會ハ其職業ニ就クヲ得ヘク(二)日本下等社會ニ規律的ノ勞働法ヲ開引シ(三)日本ノ資本ヲ增殖シ(四)日本下等人民ニ冒險進取ノ氣象ヲ涵養シ兼テ其知識ヲ倍スル等四項ノ利益アルヲ説キ且曰フ予(著者)カ移住ヲ慫慂スルハ特リ布哇ニノミアラスシテ海外到ル處ニ我同胞ノ優適セルヲ見ント欲スルモノナリ但之ヲ奬導スルハ殖民兼併ノ爲ニアラスシテ其主意唯商業的ノ新日本ヲ捏造スルニ在リ云々顧フニ布哇移住日本人民虐待ノ事ハ一タヒ新聞紙ノ一問題ヲナスニ至リタレ𪜈我總領事ノ報告書出ツルニ及ンテ世人ノ惑ヲ解キシカ此一章ハ更ニ此ヲ探確スルノ價アルモノナラン其移住ヨリ生スル所謂四利ノ中第二第四ノ如キハ我同胞ノ大缺點ニシテ若シ能ク此等ノ慣習氣象ヲ養生シ衆庶之ヲ完得スルニ至ラハ致富ノ上ニ偉大ノ功アルヿ爭フ可ラス故ニ社會ノ上下ヲ論セス生業ノ異同ヲ問ハス(必シモ「商業社會」ニ限ラス)異境ニ遷リテ此般ノ好氣風ヲ修得シ來ルハ自他ノ誠ニ祈望ニ堪エサル所ナリト雖先ツ之ヲシテ其事ノ愉快ニシテ贏利アルヲ領セシムルニアラサレハ人情誰カ濫ニ苦ニ趨クモノアランヤ好シ之ヲ領セシムルモ因襲ノ久シキ人皆本土ニ固着シテ恰モ蔦蘿ノ灌木ト共ニ枯ルヽヲ知ラサル如ク

華胥ノ國我外ニ在ルヲ顧ミサルモノヽ如シ剏ヤ中流以下ノ社會ハ嘗テ他邦ノ語ヲ學ハス一部ノ萬國地誌スラ手ニ觸レサルモノ多キニ居ル故ニ之ヲ慫慂スルノ方極メテ難キノミナラス貧窶施スノ計ナキ徒ニアラサルヨリハ幾ト皆聾者ノ如ク然リ（中流以上ノ社會ニシテ現ニ外國移住ノモノアレトモ之ヲ其全體ニ比スレハ唯櫻林ノ一瓣ニ過キス固ヨリ余輩ノ冀望ヲ滿タスニ足ラサルナリ）余ハ教育ニ頼リ汎ク此等ノ氣象ヲ涵養スルヲ以テ最實効ヲ收メ得ヘシトスル者ナレトモ著者カ毎ニ「言フヘクシテ行フヘキ說」ヲ述フルヲ主眼トシナカラ獨リ此章ニ於テ其希望ヲ達スヘキ方策ヲ擧ケサルヲ憾ムノミ

今筆ヲ擱クニ臨ミ余ハ著者カ此饑餓求食ノ世ニ際シ輿論北米ヲ推シテ通商移住ノ要地トナスノ時機ニ方リ幾千里ノ海濤ヲ渉リテ從來世人カ等閑ニ附シ去レル州國ヲ探リ大聲疾呼シテ之カ注意ヲ促カシタル勇氣ヲ稱スルト與ニ通篇事ロ其主トスル處ニ粗ヽシテ之カ題外ナル我國時勢ノ論ニ精キヲ公告セサルヘカラス又其結論ニハ海外通商ヲ勸奬セント欲スルノ熱情ヨリ言儘ク夸大ニ屬スルモノアルヿヲ公告セサルヘカラス是レ蓋シ著者カ官船ハ投シテ自在ニ探究スルヲ得サリシニモ由ルヘシト雖或ハ其意唯南洋ノ時事ヲ藉リテ我同胞ヲ警戒スルニ在ルヤモ亦未タ知ルヘカラサルナリ且通篇誠意誠心ヲ以テ我國目下ノ急務ヲ說クノ處、克ク懦夫ヲ起タシメ悲歌ノ士

ヲ皷舞シ又克ク世間趨炎附勢ノ徒ヲ羞殺セシムルニ足ルモノナラン若シ夫レ文字ノ氣勢光燄アル圓轉靈活ナル固ヨリ贅論ヲ須ヒスシテ可ナリ然ラハ余カ此著ヲ目シテ爲政家幷ニ商家ノ必讀ト謂フモ誰カ之ヲ誣ヒタリト言ハン

"The Japan Mail."

ヂヤツパンメール新聞批評

As the result of a recent visit to Australia and several other islands in the Pacific, Mr. S. Shiga has published a very interesting and suggestive book of about 200 pages, under the title *Nanyō Jiji* (Affairs in the Southern Seas). The work is somewhat disjointed, and is not entirely free from redundancy and diffusiveness of style. But despite these shortcomings, it well deserves the attention not only of the Japanese public but also of all foreigners who may have the least desire to study the drift of opinion in the Japanese nation. *Nanyō Jiji* is really a sign of the times; for it shows how intensely the thinking portion of this people feels the gravity of the country's situation in view of the increasing number of points of contact with Western races, both individually and nationally. The one idea which seems ever present in the author's mind from beginning to the end of his book, is the growing influence of European races and the rapid disappearance of native populations everywhere in the South Sea Islands. At every step almost Mr. Shiga finds opportunities for reference to the condition of his country. In the order of his visits to various localities, he opens his book with a description of

Strong Island, and after expressing the belief that this place is destined to become of importance when commericial intercourse between Japan and the Australian colonies has been developed and increased, he proceeds at some length to discuss the principal causes of the decrease of the native population of the island. The fate of the aborigines of Strong Island forcibly suggests to his mind the more vital question of the struggle between the white and the yellow races in general. Mr. Shiga takes up a position which will probably be largely supported by his countrymen when he urges the necessity of a close alliance between the two leading nations of the yellow race, that is to say, Japan and China, and the importance of maintaining with England relations of confidence and mutual trustfulness. The author proceeds in the third chapter to speak of the effects of the colonization policy of the Western Powers, and recapitulates the chief events that have recently taken place in the South Seas, giving a classification of the principal islands under the protection or rule of the different Powers of Europe and America. The subject of the next chapter is the wonderful growth of the Australian colonies in industries, in commerce, and in population; the reader's attention being strongly directed to the creation of a great market here for Japanese goods. In the fifth chapter, the opening of the Panama Canal is discussed at some length, in its bearings upon the economic conditions of the South Sea islands, and the author explains by illustration borrowed from science the benefits to be derived from the accomplishment of

the enterprise. In the next section he again takes up the Australian topic, and dwells on the splendid prospects of trade between this country and Australia. The greater part of this chapter appeared, as we stated at the time, in the editorial columns of the *Jiji Shimpo* shortly after the return of the author to this country. After further remarks on the same subject in the seventh chapter, Mr. Shiga proceeds in the next two to draw a forecast of the future of the Australian colonies. From what he has personally observed while there, he is led to believe that in the course of the next century these colonies will become independent, and form themselves into a powerful and wealthy Republic. Perhaps the most important chapter in the whole book is the tenth, in which the author describes New Zealand, and draws a graphic likeness of that island to Japan in point of geological formation, climatic position, form, and general features. He thinks that, while New Zealand will in future become the centre of trade in the South Pacific, Japan will occupy a similar position in the East. It is doubtful whether Japan will be able, if she goes on as at present, to justify this prophecy. The healthy and wonderfully rapid development of New Zealand in recent years offers a sharp contrast to the state of things in this country. Mr. Shiga, therefore, urges upon his countrymen the necessity of directing their energies in the direction pointed out by nature; that is to say, in the direction of trade and manufactures. But in this career, Japan must complete with China, which possesses an exceedingly intelligent population

of 300 millions; and he accordingly reminds his countrymen that they must exert their utmost efforts to make their future what it ought to be. In the next chapter, the author turns rather abruptly to a discussion as to the development of Hokkaido, in which his treatment of the subject is hardly all that could be desired. In the following four chapters, he relates conversations with a New Zealand aboriginal chief and with a missionary in Fiji; recounts at perhaps more than necessary length recent diplomatic episode in Samoa, and describes his meeting with the King of Samoa. In the sixteenth chapter, he oversteps the boundaries of the title of his book, and refers to the relations between Japan and the Sandwich islands; and in the next and last chapter, he speaks of the emigration of Japanese subjects to those islands. He observes that, contrary to what he had formerly heard as to the treatment of those emigrants, he was glad to see the relations between them and their employers improving more and more. *Apropos* of emigration, he recommends his fellow-countrymen to establish commercial colonies all over the world.

明治二十年三月十四日版權免許
同　年　四　月　出　版
同　年　十月二十四日再版御届
同　年　同　月　出　版　定價金五十五錢

著者兼出版人　愛知縣士族　志賀重昂
東京本郷區眞砂町三十二番地寄留

出版人　大坂府士族　小柳津要人
東京本郷區森川町一番地寄留

發兌　丸善商社書店
東京日本橋通三丁目

東京々橋區秀英舍印行

賣捌書肆

東京銀座四丁目　博聞社
同　神田表神保町　中西屋邦太
同　南傳馬町一丁目　叢書閣
京都河原町通二條下ル　大黑屋書店
大坂備後町四丁目　梅原龜七
同　北久寶寺町四丁目　丸屋書店
名古屋京町一丁目　村松五郎
加賀金澤片町　益智館
安藝廣島横町　松村善助
肥前長崎引地町　鶴野常藏
神戸相生橋際　熊谷幸介
横濱辨天通四丁目　丸屋書店

22
114

026780-000-1

22-114

南洋時事

志賀 重昂／著

M20

ADD-0481